空性表現から見た『般若心経』の成立

渡　辺　章　悟

はじめに

『般若心経』の成立については、さまざまな議論が続けられているが、未だ確定的な説はない。その原因はこれまでの心経研究が、拡大般若経の中から整理されて成立した状況を十分に踏まえていないことによる。近年ではJ. ナティヤや原田和宗の研究なども刊行され、飛躍的に研究状況は進展したが、相変わらず不十分な状況に変わりはない[1]。今回の論攷の目的は、この点の反省に立って、心経の骨格を為す空性表現に焦点を当て、心経と拡大般若経の諸資料を比較検討しつつ、その成立過程を再検討することである。

本稿で検討資料とするのは、心経の梵・蔵・漢諸本の他に、その空性説に対応する箇所を有する拡大般若[2]、特に『十万頌般若』の梵・蔵・漢訳、『二万五千頌般若』(PV)のGilgit MS、経部と論部の二種チベット語訳、*Abhisamayālaṃkāra*などである。これらの資料の検討から、心経が直接ソースとした拡大般若の記述と心経自体の成立と展開、いわ

1　筆者が初めてこの問題を扱ったのが、[渡辺章悟 1990, 1991]であった。その直後、[Nattier 1992]が刊行された。Nattierの論文は玄奘〔訳〕心経からサンスクリット文が作成されたことを主張するもので、心経と拡大般若経との影響関係を論ずる本格的な文献研究である。本論文は拙論の検討方法と類似した研究であったが、『大明呪経』の真偽を論ずる筆者の結論とは大きく異なっていた。その後、筆者は[渡辺 2009]を公刊したが、それは雑誌に連載したものをまとめたもので、原文を用いた文献資料の検討は出来なかった。次いで[原田 2010]らがNattierの説に反論を試みた。[原田 2010]は豊富な資料を駆使して心経の成立を論ずる力作であるが、翻訳があまりに独自であり、また資料を用いる意図が明確でない傾向がある。一方、欧米では[Jayarava 2007]にみられるように、Nattier論文は相変わらず支持され続けている。

2　拡大般若という般若経の分類については、[渡辺 2009a: 28ff]を参照されたい。

ば心経内部で略本（小本）から二種の広本（大本）へと段階的に整理されてゆく状況を解明しようとするものである。

特に、従来見落とされていた心経の異本の相違に着目し、大本心経に見られる前段（序分）の記述から、空性表現に至るまでの文脈を検討する。次いで、その箇所に対応する拡大般若経の記述を確認し、般若経の成立に伴った心経の成立経緯を明らかにするつもりである。

1．『般若心経』の文献資料

最初に本稿の分析に使用する『般若心経』の諸資料について述べておく。梵本は大本・小本の二種類、チベット語訳（大本）、漢訳は広略（大小）併せて八種類を記してある。

（1）サンスクリット資料

サンスクリット資料は以下の六つの刊本をあげておきたい。

［1］Edward Conze ed., The *Prajñāpāramitā-hṛdaya Sūtra,"Journal of the Royal Asiatic Society"* 1948, pp. 33-51. Reprinted in *Edward Conze Buddhist Studies* 1934-1972, Bruno Cassirer, 1967, pp.148-167.

［2］中村元校訂「『般若心経』サンスクリット原本テクスト」『般若心経・金剛般若経』（中村・紀野共著）岩波書店、1960年、171-174頁。

［3］白石壽子編『白石真道仏教学論文集』京美出版社、1988年、462-538頁。

［4］鈴木広隆「『般若心経』のネパール写本」『印度哲学仏教学』10、1995年、167-182頁。

［5］渡辺章悟『般若心経—テクスト・思想･文化』大法輪閣、2009年。本書には大本系のサンスクリット校訂テクストとその翻訳を含む。

［6］*Prajñāpāramitāhṛdayasūtram*, ed. by P. L. Vaidya, *Mahāyāna-sūtra-saṃgrahaḥ*, Part 1. Darbhanga：The Mithila Institute, 1961 (Buddhist Sanskrit Texts, 17). 本書には大本と小本の両方を含むことから、本稿ではこのテクスト［6］を使用した。

（2）漢訳資料

漢訳では以下の八種類（大正蔵、第八巻所収No.250～257）が現存する。このうち［1］と［2］が小本で、［3］～［8］が大本である。

［1］『摩訶般若波羅蜜大明呪経』（伝）鳩摩羅什（350～409年頃）訳

［2］『般若波羅蜜多心経』玄奘（649年）訳

［3］『普遍智蔵般若波羅蜜多心経』法月（668～743年）重訳　利言　開元27年（739）訳

［4］『般若波羅蜜多心経』般若・利言等（790年）訳

［5］『般若波羅蜜多心経』智慧輪（861年）訳

［6］『般若波羅蜜多心経』法成（856年）訳

［7］『唐梵翻対字音般若波羅蜜多心経』不空（746～774年頃）訳

［8］『聖仏母般若波羅蜜多経』施護（1000年頃）訳

（3）チベット語訳資料

チベット語訳『般若心経』（［*‘Phags pa*］*bcom ldan ‘das ma shes rab kyi pha rol tu phyin pa’i snying po*）は、西蔵大蔵経（ジャンサタン版No.498，チョーネNo.165，北京版No.160，デルゲ版No.21，No.531，ナルタン版No.26，No.475，ラサ版No.26，No.499）等に収録される。敦煌から回収されるチベット語訳写本には小本がみられるが、チベット大蔵経に収録されるものはいずれも大本である。さらに、西側の大蔵経系統には般若部と密教部とに二種類の訳が収録される。本稿ではラサ版の二つの系統を検討する[3]。なお、校訂出版された文献については、以下の二書を参照されたい。

［1］Sonam Gyamtsho, 新井慧誉共編『チベット語訳般若心経』世界聖典刊行協会、1983年。

［2］J. A. Silk, *The Heart Sūtra in Tibetan: A Critical Edition of the Two Recensions Contained in the Kanjur, Wiener Studien Tibetologie und Buddhismuskunde* 34, Wien, 1994.

---

[3] 東西の二系統と二種のチベット語訳心経については、［Silk 1994］及び［渡辺 2009b: 61ff］を参照されたい。

2．心経異本の関連箇所

以下に引用するのは心経の序文から空性表現にかかわる前半部分である。この箇所こそが拡大般若経をソースとするものであり、心経の多様性の背景となる一連の文脈として検討対象にすべきだからである。

本稿ではその重要性に鑑み、東アジアに絶大な影響を与えた玄奘訳『般若波羅蜜多心経』と羅什訳『摩訶般若波羅蜜大明呪経』と伝えられる二つの小本系統の漢訳心経と、その対応箇所を羅什訳『大品般若』（摩訶般若波羅蜜経）から取り出した対照表を掲げておくが、検討の便宜上、心経の内容全体を以下のように①から⑩まで十区分した。本稿で考察するのは、その①から⑥までである。なお、検討の中心となる④は、内容上（1）から（3）まで三区分した。相違する訳語には下線を施してある。

＜図表１＞

玄奘訳『般若心経』・羅什訳『大明呪經』・羅什訳『大品般若經』の比較

般若波羅蜜多心經 （大正no.251）	摩訶般若波羅蜜大明呪經 （大正no.250）	摩訶般若波羅蜜經 （大正no.223）
唐三藏法師　玄奘譯	姚秦天竺三藏　鳩摩羅什譯	後秦龜茲國三藏　鳩摩羅什譯
① 觀自在菩薩。行深般若波羅蜜多時。照見五蘊皆空。度一切苦厄。	① 觀世音菩薩。行深般若波羅蜜時。 照見五陰空。度一切苦厄。	① 欠
② 欠	② 舍利弗色空故無惱壞相。受空故無受相。想空故無知相。行空故無作相。識空故無覺相。何以故。	＜習応品第三＞ ② 舍利弗。色空故無惱壞相。受空故無受相。想空故無知相。行空故無作相。識空故無覺相。何以故。
③ 舍利子。色不異空。空不異色。	③ 舍利弗非色異空。非空異色。	③ 舍利弗。*色不異空空不異色。（*異読：非色異空。非空異色。）
④（1）色即是空。空即是色。受想行識亦復如是。 （2）舍利子。是諸法空相。 （3）不生不滅。不垢不淨不增不減。	④（1）色即是空。空即是色。受想行識亦如是。 （2）舍利弗是諸法空相。 （3）不生不滅。不垢不淨。不增不減。	④（1）色即是空空即是色。受想行識亦如是。 （2）舍利弗。是諸法空相。 （3）不生不滅。不垢不淨不增不減。

⑤ 欠	⑤ 是空法。非過去非未來非現在。	⑤ 是空法非過去非未來非現在。
⑥ 是故空中。無色。無受想行識。無眼耳鼻舌身意。無色聲香味觸法。無眼界。乃至無意識界。 無無明。亦無無明盡。乃至無老死。亦無老死盡。無苦集滅道。無智亦無得。	⑥ 是故空中。無色無受想行識。 無眼耳鼻舌身意。無色聲香味觸法。 無眼界乃至無意識界。 無無明亦無無明盡。乃至無老死無老死盡。無苦集滅道。無智亦無得。	⑥ 是故空中無色無受想行識。無眼耳鼻舌身意。無色聲香味觸法。 無眼界乃至無意識界。 亦無無明亦無無明盡。乃至亦無老死亦無老死盡。無苦集滅道。亦無智亦無得。
⑦ 以無所得故。菩提薩埵。依般若波羅蜜多故。心無罣礙。無罣礙故。無有恐怖。遠離顛倒夢想。究竟涅槃。	⑦ 以無所得故。菩薩依般若波羅蜜故。心無罣礙。無罣礙故無有恐怖。離一切顛倒夢想苦惱。究竟涅槃。	⑦ 欠
		<無生品第二十六>
⑧ 三世諸佛。依般若波羅蜜多故。得阿耨多羅三藐三菩提。	⑨ 三世諸佛依般若波羅蜜故。得阿耨多羅三藐三菩提。	⑧ 舍利弗。過去諸佛行般若波羅蜜得阿耨多羅三藐三菩提。未來諸佛亦行般若波羅蜜當得阿耨多羅三藐三菩提。舍利弗。今現在十方諸國土中。諸佛亦行是般若波羅蜜得阿耨多羅三藐三菩提。
⑨ 故知般若波羅蜜多。是大神咒。是大明咒是無上咒。是無等等咒。能除一切苦。眞實不虚故。	⑨ 故知般若波羅蜜是大明呪。無上明呪。無等等明呪。 能除一切苦眞實不虚故	<勸持品第三十四> ⑨ 釋提桓因白佛言。世尊。般若波羅蜜是大明呪無上明呪無等等明呪。 何以故。世尊。是般若波羅蜜能除一切不善。能與一切善法。
⑩ 説般若波羅蜜多咒　即説咒曰掲帝掲帝般羅掲帝般羅僧掲帝菩提僧莎訶	⑩ 般若波羅蜜呪　即説呪曰竭帝竭帝波羅竭帝波羅僧竭帝菩提僧莎呵	⑩ 欠
般若波羅蜜多心經	摩訶般若波羅蜜大明呪經	

上記の表のようにここで引用した二つの心経の漢訳を見ると、『大品般若』の中にそのソースをたどれない箇所がある。また後述するように、漢訳心経の小本と大本の漢諸訳には、冒頭①部分に大きな相違がある。特にその相違は、サンスクリット本やチベット語訳にも見られない大きさである。この問題については第 4 章以後にて検討する。

3．大明呪経の位置づけとこれまでの研究

筆者はすでに心経に於ける『大明呪経』の特異性を指摘し、その羅什訳に疑義を唱える二つの論文【渡辺 1990】【渡辺 1991】を発表した[4]。筆者はそれらの論文で、『大明呪経』が羅什訳でない理由を、経題・経録・内容の観点から次の三点にまとめた。

［1］経題：

大明呪経という経題からして羅什訳とは考えられない。羅什はvidyāを「明」あるいは「明呪」と訳し、mantraやmantra-padaは「呪」と訳す[5]。なお、チベット語訳でもrig sngags (P ed., vol.21, Mi44a4ff) であり、原文がmantra(sngags)の可能性はない。これは大品系般若経でも全く同様である[6]。

---

[4] この主張は『般若心経』の成立をめぐって公刊した二つの論文から現在まで変わっていない。そもそも『般若心経』の成立を考察する柱は二つある。一つは翻訳年代からの基準であり、もう一つは内容上の分析である。第一の基準は、やはり翻訳年代が尤も古い漢訳からもとの原本の成立年代を推定するものであり、そのためには漢訳の『般若心経』類本を分析する必要がある。そこで歴史的根拠を検討するために経典漢訳の記録（経録）から『般若心経』の翻訳状況を分析した。それが第一論文【渡辺 1990】である。

本論文ではそれまで最古の『般若心経』としてしばしば言及されてきた支謙訳『摩訶般若波羅蜜神呪経』と、現存する最古の『般若心経』とされる羅什訳『摩訶般若波羅蜜大明呪経』を、いずれも文献上の根拠がないことを明示し、翻訳から言えば『般若心経』の成立は玄奘訳以上にはたどれないことを証明したものである。

第二論文【渡辺1991】は『般若心経』の内容上の検討であり、『般若心経』のソースを拡大般若経文献にたどって影響関係を考察したものである。この第二の論文は拡大般若にまで検討を広げて『般若心経』の成立を解明しようとした最初の研究であると自負している。この分析によって『般若心経』が大品系般若を背景として成立したことを証明し、且つ羅什訳『大明呪経』と『大品般若経』の特別な関係を指摘し、『大明呪経』が他の『般若心経』類本とは異なる特殊な経典であることを明らかにしたものである。

[5] 例えば羅什訳で見ると、『小品般若』大正8, 543b（AS V ed., p.36, *ll*.30ff）に指摘できる。

[6] PVⅡ・Ⅲ, K ed., p.70, *ll*.16ff.『大品般若』大正8, 286b：Kg, vol.18, Ti 175b4ff、またTg, vol.89, Nya 78b7ff.

［２］経録：

経録の記録からみると、『大明呪経』は、羅什『大品』訳了の弘始６（404年）から320年以上経過して、さらには玄奘『般若心経』訳了の貞観23（649年）から80年を経過して初めて経録に記載されるようになるという不自然さが指摘できる[7]。

［３］内容：

梵本『般若心経』には、その写本まで見ても『大明呪経』に対応するものはない。特に、②と⑤の箇所は『般若心経』諸本すべてに対応箇所が見られない。つまり、心経としての成立が疑われる。一方、大品系の対応箇所を見ても『大明呪経』と同じく羅什訳とされる『大品』には対応箇所があり、それも一字一句相違することがない。

この点に関して、先の論文【渡辺 1991】では、それが『大明度経』羅什訳を根拠づけるのではなく、逆に後代において『大品』からカット&ペーストして作成されたためであるという可能性を指摘した。

今回、この部分をさらに関連する般若経全般まで広げて見直すことにより、拡大般若すなわち『十万頌般若』梵本、チベット語訳、漢訳『大般若波羅蜜多経』「初会」、『二万五千頌般若』梵本、チベット語訳の二系統、『大般若経』「二会」「三会」、『放光』『光讃』にも見られることを明らかにするつもりである。このことによって、『大明呪経』②の文脈が、もともと心経に関係するのではなく、拡大般若に直接由来することを指摘したい。以下は拡大般若経の関連部分である。

7　例えば僧祐（445-518年）の『出三蔵記集』等をはじめ法経『衆経目録』（594年）、費長房『歴代三宝紀』（597年）、彦琮『衆経目録』（602年）、静泰『衆経目録』（663-665年）、道宣『大唐内典録』（664年）、靖邁『古今訳経図紀』（7C）、明佺等『大周刊定衆経目録』（695年）など多くの経録には記載がなく、智昇『開元釈教録』（730年）に至って初めて記載される。それを受けて円照『貞観新定釈経目録』（800年）もこれを引用するようになる。

4．拡大般若経の対応箇所

ここでは拡大般若経諸本を引用することは不可能なので、心経が直接成立する根拠となった大品系の梵本（『二万五千頌般若』）の該当箇所を引用しておく。その他の対応箇所は、資料編を参照されたい。

（1）『二万五千頌般若』*Pañcaviṃśatisāhasrikā Prajñāpāramitā* Ⅰ-1, ed. Takayasu Kimura（Tokyo：Sankibo Busshorin, 2007）=PvsP1-1
（サンスクリット原文は「資料編」を参照。丸数字は先の十区分の番号である。）
〔和訳〕

なぜならシャーリプトラよ。色形の空性、それは色ではない。感受の空性、それは感受ではない。想念の空性、それは想念ではない。意志の空性、それらは意志ではない。識別の空性、それは識別ではない。それはなぜか。②なぜなら、色形の空性、それは色形を表さない。感受の空性、それは感受されない。想念の空性、それは想念しない。意志の空性、それらは意志を為さない。識別の空性、それは識別しないからである。③なぜなら、シャーリプトラよ、色形と空性は別のものではないし、空性と色形は別のものでもない。④（1）色形はまさに空性であり、空性はまさに色形である。感受と空性は別のものではないし、空性と感受は別のものでもない。感受はまさに空性であり、空性はまさに感受である。想念と空性は別のものではないし、空性と想念は別のものでもない。想念はまさに空性であり、空性はまさに想念である。意志と空性は別のものではないし、空性と意志は別のものでもない。意志はまさに空性であり、空性はまさに意志である。識別と空性は別のものではないし、空性と識別は別のものでもない。識別はまさに空性であり、空性はまさに識別である。＜以上、集諦の教示＞

④（3）シャーリプトラよ、空性は生ぜず、滅せず。汚れず、浄まらず。損減せず、増大せず。⑤過去のものでなく、未来のものでなく、現在のものでない。⑥そしてこのようなもの（空性）には、（1）

色形はなく、感受はなく、想念はなく、意志はなく、識別はなく、（２）地界・水界・火界・風界・識界はなく、（３）眼処・色処、…意処・法処はなく、（４）眼界・色界・眼識界はなく、…意界・法界・意識界はない。（５）無明の発生もなく、無明の消滅、…老死・憂愁・悲嘆・苦痛・落胆・絶望の生起もなく、消滅もない。苦集滅道もなく、〔四聖諦を〕得ること・現観もない。

（２）動詞句による空性表現

まず、『大明呪経』に特有の②「色空故無悩壊相…」（羅什訳『大明呪』・『大品経』）であるが、『二万五千頌般若』PVの上記対応箇所に見ると、以下のようになっている。

「〔なぜなら実にシャーリプトラよ、〕色の空性、それは色ではない。…なぜならば色の空性は色形を表わさないからである。…」（tathā hi śāriputra yā rūpasya śūnyatā na tad rūpam … tathā hi yā rūpaśūnyatā na sa rūpayati[8] …., PV Kimura I -1, p.64, *ll*.2-3）

云々といい、五蘊の空性を動詞句によって述べている。

この箇所は、心経全体では『大明呪経』にのみ特有の表現であるが、大品系には＜図表１＞「玄奘訳『般若心経』・羅什訳『大明呪経』・羅什訳『大品般若経』の比較」（39頁以下）のように完全に一致する箇所が見られるのである。

さらにその箇所を、拡大般若経の対応箇所に探ってみると、『十万頌般若』、『二万五千頌般若』（Gilgit MS, PV）・同チベット語訳・漢訳（『放光』・『光讃』・『大品』）、『大般若波羅蜜多経』（初会・二会・三会）とすべて含まれている（資料編22頁以下を参照）。このことから、『大明呪経』に見られる②の空性表現は、拡大般若をソースとしたものであることがわかる。一方、玄奘訳その他のすべての心経には、この②の箇所が見ら

[8] 動詞√rupは「暴力を受ける、苦悩を受ける」などの意味であるが、E. Conzeもこれをmolest（苦しめる、悩ます）と訳す。チベット語訳（Ga 62a3）は、thogs par mi byed doと訳す。

れない。つまり心経成立に至って、拡大般若の②相当箇所が簡略化のために省略されたとみられる。この大品系の要素こそが心経成立への祖型と言える第一段階である。

5. 梵文心経の分析

(1) サンスクリット文『般若心経』の空性表現

次に梵文大本心経の空性表現にかかわる部分の翻訳を示しておこう。

①このように私は聞きました。あるとき世尊は王舎城（rājagṛha）の霊鷲山に（gṛdhrakūṭe parvate）比丘と菩薩の大サンガとともに滞在しておられた。

その時また世尊は、「深遠な光輝」（gambhirāvabhāsa）という名の法門を説き、三昧に入られた。

そのとき、聖なる観自在菩薩摩訶薩は、深遠な智慧の完成を実践しつつ、次のように見通された。「［存在するものの］五つの構成要素（五蘊）があり、そして、それらはもともと空（自性空）である」と見られた。

そこで実に、シャーリプトラ（舎利子）長老は仏の力を受けて、聖なる観自在菩薩〔摩訶薩〕に次のように言った。

「もしもある誰か立派な家柄の男子（善男子）や立派な家柄の女子（善女人）が、この深遠な智慧の完成を実践したいと願ったときには、どのように学んだらよいのでしょうか」と。

このように述べたとき、菩薩にして偉大な方である聖なる観自在は、シャーリプトラ長老に次のように言われた。

「シャーリプトラよ、もしもある誰か立派な家柄の男子や立派な家柄の女子が、〔この〕深遠な智慧の完成を実践したいと願ったときには、次のように見通すべきなのです。“〔存在するものの〕五つの構成要素がある。そして、それら（五蘊）はもともと空であると見た”と。

［第一段］実にシャーリプトラよ。色は空性であり、空性こそが色なのである。［②欠］

［第二段］③色は空性と別ではなく、空性は色と別ではない。

［第三段］④（1）およそ色、それが空性であり、空性、それが色なのである。これと同じように、感受作用（受）･表象作用（想）･意志作用（行）･認識作用（識）も、空性なのである。（2）実にシャーリプトラよ、すべてのものは空であり、特質がなく、（3）生じたものではなく、滅したものでもない。汚れがなく、汚れを離れたものでもない。不足したものではなく、充足したものでもない。

①evaṃ mayā śrutam | ekasmin samaye bhagavān rājagṛhe viharati sma gṛdhrakūṭe parvate mahatā bhikṣusaṃghena sārdhaṃ mahatā ca bodhisattvasaṃghena | tena khalu samayena bhagavān gambhīrāvasaṃbodhaṃ nāma samādhiṃ samāpannaḥ | tena ca samayena āryāvalokiteśvaro bodhisattvo mahāsattvo gambhīrāyāṃ prajñāpāramitāyāṃ caryāṃ caramāṇaḥ evaṃ vyavalokayati sma | pañca skandhāṃstāṃśca svabhāvaśūnyaṃ vyavalokayati ‖

athāyuṣmān śāriputro buddhānubhāvena āryāvalokiteśvaraṃ bodhisattvametadavocat – yaḥ kaścit kulaputro [vā kuladuhitā vā asyāṃ] gambhīrāyāṃ prajñāpāramitāyāṃ caryāṃ cartukāmaḥ, kathaṃ śikṣitavyaḥ? evamukte āryāvalokiteśvaro bodhisattvo mahāsattvaḥ āyuṣmantaṃ śāriputrametadavocat – yaḥ kaściccharipūtra kulaputro va kuladuhitā vā [asyāṃ] gambhīrāyāṃ prajñāpāramitāyāṃ caryāṃ cartukāmaḥ, tenaivaṃ vyavalokitavyam – pañca skandhāṃstāṃśca svabhāvaśūnyān samanupaśyati sma |

rūpaṃ śūnyatā, śūnyataiva rūpam/

③rūpān na pṛhak śūnyatā, śūnyatāyā na pṛthag rūpam/

④（1）yad rūpaṃ sā śūnyatā, yā śūnyatā tad rūpam/ evaṃ vedanāsaṃjñāsaṃskāravijñānāni ca śūnyatā/（2）evaṃ śāriputra sarvadharmāḥ śūnyatālakṣaṇā（3）anutpannā aniruddhā amalā vimalā anūnā asaṃpūrṇāḥ

ここに見られるように、上記梵本は①から直接③へと続いており、『大

明呪経』や『大品』に含まれる②に相当する空性表現は見られない。

（２）空性の教説の構造分析

サンスクリット文『般若心経』の空性表現は、①の末尾から④にかけて見られるが、多くは次のような三段形式で説かれる。

第一段：rūpaṃ śūnyatā, śūnyataiva rūpam/
第二段：rūpān na pṛthak śūnyatā, śūnyatāyā na pṛthag rūpam/
⇒③
第三段：yad rūpaṃ sā śūnyatā, yā śūnyatā tad rūpam/ evaṃ vedanāsaṃjñāsaṃskāravijñānāni ca śūnyatā/ ⇒④（１）

この形式の概要は小本も大本も同じである。ところが、この三段を十区分に対応させると、第一段は末尾の下線部以外は対応しないが、第二段は③に対応し、第三段は④（１）に対応する。

ただし、第一段では多くのネパール写本はrūpaṃ śūnyam, śūnyataiva rūpamとし、チベット語訳もgzugs stong pa'o// stong pa nyid gzugs soとして、この読みを支持する[9]。インド系の多くの註釈者すなわちヴィ

---

[9] 『二万五千頌般若』（PV）ではrūpaṃ śūnyamは通常の空性表現で枚挙にいとまがない。『般若心経』のこの箇所に対応する記述としては以下の用例がある。tena khalu punar na rūpaṃ śūnyam iti vikalpayiṣyanti, na śūnyatāṃ rūpam iti vikalpayiṣyanti, na vedanāṃ na saṃjñāṃ na saṃskārān na vijñānaṃ śūnyam iti vikalpayiṣyanti, na śūnyatāṃ vijñānam iti vikalpayiṣyanti.（T. Kimura ed., PV Ⅱ-Ⅲ, p.16, *l*.16）これに対応する記載は『十万頌般若』（ŚsP：Takayasu KIMURA ed., *Śatasāhasrikā Prajñāpāramitā* Ⅱ-3（山喜房佛書林、2010）でも見られる。
na rūpaṃ śūnyam iti vikalpayiṣyanti, na śūnyatāṃ rūpam iti vikalpayiṣyanti,（ŚsP Ⅱ-3, *l*.11）, tena khalu punar na rūpaṃ śūnyam iti vikalpayiṣyanti, na śūnyatāṃ rūpam iti vikalpayiṣyanti, na vedanāṃ śūnyeti vikalpayiṣyanti, na śūnyatāṃ vedaneti vikalpayiṣyanti, na saṃjñāṃ śūnyeti vikalpayiṣyanti, na śūnyatāṃ saṃjñeti vikalpayiṣyanti, na saṃskārān śūnyā iti vikalpayiṣyanti, na śūnyatāṃ saṃskārā iti vikalpayiṣyanti, na vijñānaṃ śūnyam iti vikalpayiṣyanti, na śūnyatāṃ vijñānam iti vikalpayiṣyanti,（ŚsP II-3, *l*.20）.

マラミトラ、ジュニャーナミトラ、アティシャ、シュリーマハージャナ、ヴァジュラパーニなどもこの読みを支持する。

また、第三段は④（１）に対応するが、『般若心経』ではほぼすべてのネパール写本に欠けているばかりか、チベット語訳にも見られない。したがってプラシャーストラセーナを除き、大部分の註釈者もこの第三段には言及していない[10]。

しかし、拡大般若では『般若心経』第三段の用例に非常に近似した文例が見られる。例えば『二万五千頌般若』には二箇所ある。一つは従来から『般若心経』のソースとみなされている箇所であるが、ここではその少し前に出てくるもう一つの文例を以下に引用しておきたい。

まず、シャーリプトラが世尊に菩薩摩訶薩の般若波羅蜜の実践とは何かを問い、世尊がそれに答えるという場面である。

> 般若波羅蜜を実践する菩薩は、菩薩こそがそのまま菩薩であると見ない。菩薩の名称も見ない。菩薩行も見ない。般若波羅蜜も見ない。色も見ない。同様に受想行識も見ない。それは何故かというと、菩薩摩訶薩は菩薩の自性が空だからであり、般若波羅蜜は般若波羅蜜の自性が空だからである。それは何故かというと、これ（空性）がその本質だからである(prakṛtir asyaiṣā)。なぜなら色は空性によって空なのではなく（śūnyatayā na rūpaṃ śūnyaṃ)、受想行識は空性によって空なのではない。色と空性は別なのではなく（nānyatra rūpāc chūnyatā)、受想行識と空性は別なのではない。それは何故かというと、色こそが空性であり（rūpam eva śūnyatā)、受想行識こそが空性なのである。空性こそが色であり（śūnyataiva rūpaṃ)、空性こそが受想行識なのである。[中略]〔すべてを〕幻とみる自性には、生ずることなく、滅することなく、汚れなく、清浄でない（notpādo na nirodho na saṃkleśo na vyavadānam)。このように般若波羅蜜を実践する菩薩摩訶薩は、生ずること、滅すること、汚れ、清浄さえも見ない。(PV1-Ⅰ pp. 53～54)

10［渡辺 2016］参照。

この箇所を梵本『般若心経』と比較すると、①の最後の「五蘊があり、それらが自性空であると見た」が、PVでは「色も見ない。同様に受想行識も見ない。それは何故かというと、菩薩摩訶薩は菩薩の自性が空だからである」(tathā hi bodhisattvo mahāsattvo bodhisattvasvabhāvena śūnyaḥ)というように、<菩薩は五蘊を見ない>とする否定的表現になっているが、結果的に「〔その〕自性が空」とする内容は等しい。

続いて『般若心経』の第一段:「色が空性であり、空性こそが色である」(rūpaṃ śūnyatā, śūnyataiva rūpam)という文脈は、PVでは第二段の後にあって順序こそ異なるが、「色が空性であり、感受・表象・意思・識別作用こそが空性である。空性こそが色であり、空性こそが感受・表象・意思・識別作用である。」(rūpam eva śūnyatā, vedanaiva śūnyatā, saṃjñaiva śūnyatā, saṃskārā eva śūnyatā, vijñānam eva śūnyatā, śūnyataiva rūpaṃ, śūnyataiva vedanā, śūnyataiva saṃjñā, śūnyataiva saṃskārāḥ, śūnyataiva vijñānam.)とあり、よく一致する。ただその間に、五蘊のそれぞれについて同様の繰り返しがあるだけである。

また、『心経』の第二段:rūpān na pṛthak śūnyatā, śūnyatāyā na pṛthag rūpam は、PVでは「色と空性は別なのではなく(nānyatra rūpāc chūnyatā)、〔受想行識と空性は別なのではない〕」とあり、pṛthakとanyatraと用語が異なるだけで、内容は一致する。ただし、その記述の順が異なっている点は重要である。なぜならその違いは他の拡大般若も同じだからである。このような伝承の相違をどのように考えるべきであろうか[11]。

6. 漢訳心経の空性表現の分析

(1)空性表現の入れ替え→「大本1」

上記の問題を整理しておこう。まず、③「色形は空性と別ではなく、

[11] なお、空性表現の最後に出てくる否定は、*Abhisamaya*に影響を受けている新しいPV資料では、四不(notpādo na nirodho na saṃkleśo na vyavadānam)であるが、Gil MSではより簡潔な表現になっているにもかかわらず、六不(anutpādaḥ anirodaḥ na hānir na vṛddhiḥ na saṃkleśo na vyavadānam)となっていて興味深い。

空性と色形は別ではない」(rūpān na pṛthak śūnyatā śūnyatāyā na pṛthag rūpam色不異空・空不異色)[12]と、これに続く④（１）の「色形こそが空性であり、空性こそが色形である」(PV：rūpam eva śūnyatā śūnyataiva rūpam, Hṛdaya：yad rūpaṃ sā śūnyatā, yā śūnyatā tad rūpam色即是空・空即是色）であるが、これは大品系諸本の対応箇所でもすべて③・④（１）の順に変わりはない。玄奘訳をはじめ多くの漢訳心経でも同様である。

- 舎利弗非色異空。非空異色。色即是空。空即是色。受想行識亦如是。舎利弗是諸法空相。不生不滅。不垢不淨。不增不減。(伝羅什訳)
- 舎利子。色不異空。空不異色。色即是空。空即是色。受想行識亦復如是。舎利子。是諸法空相。不生不滅。不垢不淨不增不減。(玄奘訳)
- [於斯告舎利弗。諸菩薩摩訶薩應如是學。色性是空空性是色。] 色不異空空不異色。色即是空空即是色。受想行識亦復如是。識性是空空性是識。識不異空空不異識。識即是空空即是識。舎利子。是諸法空相。不生不滅不垢不淨不增不減。(法月訳)
- [觀自在菩薩摩訶薩答具壽舎利子言。若善男子及善女人。欲修行甚深般若波羅蜜多者。彼應如是觀察。五蘊體性皆空。] 色即是空。空即是色。色不異空。空不異色。如是受想行識。亦復皆空。是故舎利子。一切法空性。無相無生無滅。無垢離垢。無減無增。(法成訳)
- [爾時觀自在菩薩摩訶薩告具壽舎利弗言。舎利子。若善男子善女人行甚深般若波羅蜜多行時。應觀五蘊性空。] 舎利子。色不異空空不異色。色即是空空即是色。受想行識亦復如是。舎利子。是諸法空相。不生不滅不垢不淨不增不減。(般若・利言訳)
- [舎利子。若有善男子。善女人。行甚深般若波羅蜜多行時。應照見五蘊自性皆空。離諸苦厄。舎利子。色空。空性見色。] 色不異空。空不異色。是色即空。是空即色。受想行識。亦復如是。舎利子。是諸法性相空。不生不滅。不垢不淨。不減不增。(智慧輪訳)
- [告尊者舎利子言。汝今諦聽爲汝宣説。若善男子善女人。樂欲修學此甚深般若波羅蜜多法門者。當觀五蘊自性皆空。何名五蘊自性空耶。]

[12] ただし、大品系諸本のSktはpṛthakをanyadと表記する。

所謂即色是空即空是色。色無異於空。空無異於色。受想行識亦復如是。舍利子。此一切法如是空相。無所生。無所滅。無垢染。無清淨。無増長。無損減。（施護訳）

しかし、大小のサンスクリット心経、大本チベット語訳と法月、智慧輪の二つの漢訳は、①の末尾（③の前）に、［第一段］「色形は空性であり、空性こそが色形である」（rūpam śūnyatā, śūnyataiva rūpam; gzugs stong pa'o, stong pa nyid kyang gzugs so; 法月訳「色性是空空性是色」（849a28）；智慧輪訳「色空。空性見色」（850a21））の一文が添加されている。これは主として大本にて付加された序文の繰り返し部分の最後に据えられた結論である。この語があることにより、「実にシャーリプトラよ、"色形は空性であり、空性こそが色形である"。色形は空性と異ならず、空性は色形と異ならない」（Skt.）[13]というように、①と③が一体化し、理解しやすい教説となっている。このグループを便宜上「大本１」としておく。

（２）空性表現の削除→「大本２」

さらに次の段階になると、この添加された一文「色性是空空性是色」と④（１）「色即是空空即是色」の内容が重複することから、それを避けるために先の「色形は空性であり、空性こそが色形である」を削除した。その形がチベット語訳大本と般若・利言訳、法成訳、施護訳の三つの漢訳である。これらは比較的後代の翻訳に限られている。また、玄奘訳や智慧輪訳に見られる「度（離）一切苦厄」に対応する語句もみられないことから、大本の第二段階の発達系「大本２」とみなすことが出来る[14]。

以上のことから心経の空性表現に、［１］大品系・小本心経、［２］大本心経１（梵本・法月訳・智慧輪訳）、［３］大本心経２（チベット語訳

---

13 法月訳「諸菩薩摩訶薩應如是學。色性是空空性是色。色不異空空不異色」（大正849a27-29」）

14 ただし、般若・利言訳は「離一切苦厄」を踏襲し、この語句については明確にグループ分け出来ない。

大本・般若訳・法成訳・施護訳)という三段階の変化が指摘できる。

この分析にもとづいて、大本１（法月訳･智慧輪訳)、大本２（施護訳）といった代表的大本の三つの漢訳全文を比較したものが以下の図表２「心経漢三訳の段階的発展」である。

＜図表２＞

心経大本系漢三訳の段階的発展

普通智藏般若波羅蜜多心經 （大正No.252）	般若波羅蜜多心經 （大正No.254）	佛説聖佛母般若波羅蜜多經 （No.257）
摩竭提國三藏沙門　法月譯	唐上都大興善寺三藏沙門 智慧輪譯	西天譯經三藏　施護譯
① 如是我聞。一時佛在王舍大城靈鷲山中。與大比丘衆滿百千人。菩薩摩訶薩七萬七千人倶。其名曰觀世音菩薩。文殊師利菩薩。彌勒菩薩等。以爲上首。皆得三昧總持。住不思議解脱 爾時觀自在菩薩摩訶薩在彼敷坐。於其衆中即從座起。詣世尊所。面向合掌曲躬恭敬。瞻仰尊顏而白佛言。世尊。我欲於此會中。 説諸菩薩普遍智藏般若波羅蜜多心。唯願世尊聽我所説。爲諸菩薩宣祕法要。 爾時世尊以妙梵音。告觀自在菩薩摩訶薩言。 善哉善哉　具大悲者。聽汝所説。與諸衆生作大光明。 於是觀自在菩薩摩訶薩蒙佛聽許。佛所護念。入於慧光三昧正受。入此定已。 以三昧力行深般若波羅蜜多時。照見五蘊自性皆空。 彼了知五蘊自性皆空。從彼三昧安詳而起。 即告慧命舍利弗言。善男子。菩薩有般若波羅蜜多心。名普遍智藏。汝今諦聽善思念之。吾當爲汝分別解説。作是語已。慧命舍利弗白觀自在菩薩摩訶薩言。唯大淨者。願爲説之。今正是時。於斯告舍利弗。諸菩薩摩訶薩應如是學。**色性是空　空性是色**。	① 如是我聞。一時薄誐梵。住王舍城鷲峯山中。與大苾蒭衆。及大菩薩衆倶。爾時世尊。入三摩地。名廣大甚深照見。 時衆中有一菩薩摩訶薩。名觀世音自在。行甚深般若波羅蜜多行時。照見五蘊自性皆空。 即時具壽舍利子。承佛威神。合掌恭敬。白觀世音自在菩薩摩訶薩言。聖者。若有欲學甚深般若波羅蜜多行。云何修行。如是問已。 爾時觀世音自在菩薩摩訶薩。告具壽舍利子言。舍利子。若有善男子。 善女人。行甚深般若波羅蜜多行時。應照見五蘊自性皆空。離諸苦厄。**舍利子。色空。空性見色。**	① 如是我聞。一時世尊。在王舍城鷲峯山中。與大苾蒭衆千二百五十人倶。并諸菩薩摩訶薩衆。而共圍繞爾時世尊。即入甚深光明宣説正法三摩地。 時觀自在菩薩摩訶薩。在佛會中。而此菩薩摩訶薩。已能修行甚深般若波羅蜜多。觀見五蘊自性皆空　爾時尊者舍利子。承佛威神。前白觀自在菩薩摩訶薩言。若善男子善女人。於此甚深般若波羅蜜多法門。樂欲修學者。當云何學時觀自在菩薩摩訶薩。 告尊者舍利子言。汝今諦聽爲汝宣説。若善男子善女人。樂欲修學此甚深般若波羅蜜多法門者。**當觀五蘊自性皆空。何名五蘊自性空耶。**
② 欠	② 欠	② 欠

③ 色不異空空　不異色。 ④(1) 色即是空　空即是色。受想行識亦復如是。識性是空空性是識。識不異空空不異識。識即是空空即是識。 (2) 舎利子。是諸法空相。 (3)不生不滅不垢不淨不増不減。	③ 色不異空。空不異色。 ④-(1) 是色即空。是空即色。受想行識。亦復如是。 (2) 舎利子。是諸法性相空。 (3) 不生不滅。不垢不淨。不減不増。	④(1) 所謂即色是空即空是色。 ③ 色無異於空。空無異於色。受想行識亦復如是。 (2) 舎利子。此一切法如是空相。 (3) 無所生。無所滅。無垢染。無清淨。無増長。無損減。
⑤ 欠	⑤ 欠	⑤ 欠
⑥ 是故空中無色。無受想行識。無眼耳鼻舌身意。無色聲香味觸法。無眼界乃至無意識界。無無明亦無無明盡。乃至無老死亦無老死盡。無苦集滅道。無智亦無得。	⑥ 是故空中。無色。無受想行識。無眼耳鼻舌身意。無色聲香味觸法。無眼界。乃至無意識界。無無明。亦無無明盡。乃至無老死盡。無苦集滅道。無智證無得。	⑥ 舎利子。是故空中無色。無受想行識。無眼耳鼻舌身意。無色聲香味觸法。無眼界。無眼識界。乃至無意界。無意識界。無無明。無無明盡。乃至無老死。亦無老死盡。無苦集滅道。無智。無所得。亦無無得。
⑦ 以無所得故。菩提薩埵依般若波羅蜜多故心無罣礙。無罣礙故無有恐怖。遠離顛倒夢想。究竟涅槃。	⑦以無所得故。菩提薩埵。依般若波羅蜜多住。心無障礙。心無障礙故。無有恐怖。遠離顛倒夢想。究竟寂然。	⑦ 舎利子。由是無得故。菩薩摩訶薩。依般若波羅蜜多相應行故。心無所著。亦無罣礙。以無著無礙故。無有恐怖。遠離一切顛倒妄想。究竟圓寂。
⑧ 三世諸佛依般若波羅蜜多故。得阿耨多羅三藐三菩提。	⑧ 三世諸佛。依般若波羅蜜多故。得阿耨多羅。三藐三菩提。現成正覺。	⑧ 所有三世諸佛。依此般若波羅蜜多故。得阿耨多羅三藐三菩提。
⑨ 故知般若波羅蜜多是大神呪。是大明呪。是無上呪。是無等等呪。能除一切苦眞實不虚。	⑨ 故知般若波羅蜜多。是大眞言。是大明眞言。是無上眞言。是無等等眞言。能除一切苦。眞實不虚。	⑨ 是故應知。般若波羅蜜多。是廣大明。是無上明。是無等等明。而能息除一切苦惱。是即眞實無虚妄法。

以上のように、心経の前段①に着目し、その後に続く空性表現③と④の記述の相違によって上記のような三つの系統に分かれることが確認できたと考える。

7．諸法空相について

また④-(2)「諸法空相」は心経には共通しているが、サンスクリット文の『十万頌般若』、『二万五千頌般若』（新・旧＝Gil MS）対応箇所には見られないし、漢訳でも大品系の『放光』『光讃』には見られない。ところが、これより後代の漢訳『大品般若』『大般若波羅蜜多経』（初会・二会・三会）になって見られるようになり、この系譜が梵蔵漢すべての心経に踏襲されたものと考えられる。『二万五千頌般若』では、④-(1)と④-(2)は、多くの空性を様々な法相で詳細に説くのみで基本的な思想に変わりはない。

ただし、『般若心経』の梵本では前段までの空説を総括して「このようにあらゆる存在は空性という性質を有し(śūnyatālakṣaṇā)」云々と説くが、多くのネパール写本にはsvabhāvaśūnyāḥ alakṣaṇāḥまたはsvabhāvena śūnyā alakṣaṇāの他、svabhāvaśūnyā| alakṣaṇāとするものなど、多くの異読がある。

また、チベット語訳心経では「諸法空相(śūnyālakṣaṇa)」は、「一切のものは空性であって、無相である」(stong pa nyid de, mtshan nyid med pa:śūnyatā alaṣaṇāḥ)[15]という二語のコンパウンドで解釈しており、チベット大蔵経に伝わる本経の註釈者たちは、皆この解釈(無相)を取っている[16]。このように漢訳「空相」とチベット語訳「空性で無相であり」では解釈が異なる。この点も中国とチベットの伝統が相違する顕著な例である。

8．三時の空性表現

また、次の⑤は空性を過去・未来・現在の三時に及んで説くものであり、この表現は『大明呪経』と『大品般若』に共通するものの、他の『般若心経』には見られない。この表記と一致するのは、大品系の漢訳(『放光』・『光讃』・『大品』・『大般若波羅蜜多経』初会・二会・三会)の他、

---

15 因みに、詳細は筆者の校訂テクスト([渡辺 2009b:29])を参照されたい。なお、本書の註14をはじめ何カ所かでśūnyaをśunyaと誤記している。ここに慎んで訂正しておきたい。チベット語訳については[Silk 1994:122-123]を参照.

16 註釈の翻訳は、[渡辺 2016]を参照されたい。

17『十万頌般若』や『二万五千頌般若』(Gilgit MS)、チベット語訳(PVKG)には、さらにこの三時の空性説をもう一度繰り返して説いている。ただし、心経はこの繰り返しを省略したというより、この展開以前に定型化していったのであろう。

18 Larger Prajñāpāramitā:Ragh Vira & Lokesh Chandra (eds.), *Gilgit Buddhist Manuscripts*, Śatapiṭaka vol.10(3-5), New Delhi, 1966-1970. Stefano Zacchetti, *In Praise of the Light : A Critical Synoptic Edition with an Annotated Translation of Chapters* 1-3 *of Dharmarakṣa's Guang zan jing, Being the Earliest Chinese Translation of the Larger Prajñāpāramitā* (Bibliotheca Philologica et Philosophica Buddhica, 8), Tokyo 2005, pp.4-30.

19 この写本は常にśūnyatāをśunyatāと記す。

サンスクリットの『二万五千頌般若』と『十万頌般若』、及びチベット語訳に見られるように、拡大般若の共通表現であった[17]。心経は六不(④-(3))に続くこの箇所⑤を省略して、⑥「その故に、そこ（空性）において五蘊はない」と結論を示したのであろう。ここに心経としての完成形を見ることが出来るし、心経成立について一定の年代上の基準を付与することが出来るだろう。なお、『大明呪経』に限定される⑤の記述は、前述したように、後代に『大品』から適用したもので、心経の翻訳とは考えられない。

結論

これまで検討してきたように、心経には小本と大本の二形態があり、小本から大本へと発展した。その祖型である小本は大品系般若にもとづいて成立したものである。本稿では心経の中心思想である空性表現に着目することにより、拡大般若が心経の成立に与えた外部からの影響と、心経の内部の展開を読み取った。

そこで明らかにしたように、大品系般若から『十万頌般若』等の般若へ発展するなかでも、『般若心経』に対応する空性表現を見る限り、この文脈は大きな変化を被ることなく、般若経としての規格化・定型化を保っていた。

一方『心経』においては、小本の経典としての特異性を鑑み、ある経典作者が序文を付加することによって、通常の経典の形態が備えられていった。それが大本である。また、その大本の序文も、大品系統(『二万五千頌般若』の祖型）を素材にして形成された。その序文の文脈が整えられてゆく過程で、再び拡大般若の空性表現を依用し、それを整理して、再構成された。それが大本の変化である。

本稿ではそれを大本の二系統（大本１･大本２）に分類し、梵本心経、及び法月訳・智慧輪訳などの＜大本１＞から、チベット語訳と漢訳の般若訳・法成訳・施護訳の＜大本２＞と設定した。そして拡大般若経諸本及び心経諸本の空性表現を分析した結果、心経は小本→大本１→大本２という三段階を経て展開したことが判明した。

【参考文献】

［Nattier 1992］：Jan Nattier,"The Heart Sūtra：A Chinese Apocryphal Text?" *The Journal of the International Association of Buddhist Studies* 5-2, 1992, pp.153-223.

［Silk 1994］：J. A. Silk, *The Heart Sūtra in Tibetan*：*A Critical Edition of the Two Recensions Contained in the Kanjur*, Wien, 1994.

［Jayarava 2007］：Jayarava The Heart Sūtra - Indian or Chinese, 2007.9.

［渡辺 1990］：渡辺章悟「経録からみた『摩訶般若波羅蜜呪経』と『摩訶般若波羅蜜大明呪経』」『印仏研究』39-1、1990.7, pp.54-58）

［渡辺 1991］：渡辺章悟「般若心経成立論序説―『摩訶般若波羅蜜大明呪経』と『大品般若経』の関係を中心として」『仏教学』31、1991.7）

［渡辺 2009a］：渡辺章悟『金剛般若経の研究』山喜房佛書林、2009.

［渡辺 2009b］：渡辺章悟『般若心経―テクスト・思想・文化』大法輪閣、2009.

［渡辺 2016］：渡辺章悟・高橋尚夫編『般若心経註釈集成〈インド・チベット編〉』起心書房、2016.9）

［原田 2010］：原田和宗『「般若心経」成立史論』大蔵出版、2010.

＊＊＊＊＊＊ 資料編 ＊＊＊＊＊＊

Ⅰ．心経の空性表現に対応する拡大般若文献

1．『十万頌般若』*Śatasāhasrikā-Prajñāpāramitā*. P. Ghoṣa ed., *Bibliotheca Indica* New Series, no.1007（Calcutta：Asiatic Society of Bengal, 1902）. Part 1, Fas.2, p.139, *l*.19- p.141, *l*.15.

②yā śāradvatīputra śūnyatā na tadrūpaṃ tathā hi yā rūpasya śūnyatā na sā rupayati, yā vedanāśūnyatā na sā vedanā, tathā hi yā vedanāśūnyatā na sā vedayati, yā saṃjñāśūnyatā na sā saṃjñā tathā hi yā saṃjñāśūnyatā na sā sañjānāti, yā saṃskāraśūnyatā na te saṃskārās tathā hi yā saṃskāraśūnyatā, na sābhisaṃskaroti, yā vijñānasya śūnyatā na tad vijñānaṃ tathā hi yā vijñānaśūnyatā na sā vijānāti, tat kasya hetor

③na hi śāradvatīputra anyad rūpam anyā śūnyatā nānyā śūnyatā

nānyad rūpaṃ,
④（1）rūpam eva śūnyatā śūnyataiva rūpam, nānyā vedanā nānyāśūnyatā, nānyā śūnyatā nānyā vedanā vedanaiva śūnyatā śūnyataiva vedanā, nānyā saṃjñā nānyāśūnyatā nānyā śūnyatā nānyā saṃjñā śūnyataiva saṃjñā saṃjñaiva śūnyatā, nānye saṃskārāḥ nānyā śūnyatā nānyā śūnyatā nānye saṃskārāḥ saṃskārā eva śūnyatā śūnyataiva saṃskārāḥ, nānyad vijñānaṃ nānyā śūnyatā nānyā śūnyatā nānyad vijñānaṃ, vijñānam eva śūnyatā śūnyataiva vijñānaṃ,
（3）yā śāradvatiputra śūnyatā na sā utpadyate na nirudhyate na saṃkliśyate, na vyavadāyate na hīyate na varddhate
⑤na sā atītā nānāgatā na pratyutpannā yā na utpadyate na nirudhyate na saṃkliśyate na vyavadāyate na hīyate na barddhate nātītā nānāgatā na pratyutpannā
⑥na tatra rūpaṃ na vedana na saṃjñā na saṃskārāḥ na vijñānaṃ, na tatra cakṣur na śrotraṃ na ghrāṇaṃ na jihvā na kāyo na manaḥ, na tatra rūpaṃ na śabdo na gandho na raso na spraṣṭavyaṃ na dharmmāḥ, na tatra pṛthivīdhātur nābdhātur na tejodhātur na vāyudhātur nākāśadhātur na vijñānadhātuḥ, na tatra cakṣurdhātur na rūpadhātur na cakṣurvijñānadhātuḥ, na tatra śrotradhātur na śabdadhātur na śrotravijñānadhātuḥ, na tatra ghrāṇadhātur na gandhadhātur na ghrāṇavijñānadhātuḥ, na tatra jihvādhātur na rasadhātur na jihvāvijñānadhātuḥ na kāyadhātur na spraṣṭavya（p.141）dhātur na kāyavijñānadhātuḥ, na tatra manodhātur na dharmadhātur na manovijñānadhātuḥ, na tatra ‘vidya nāvidyānirodho na tatra saṃskāra na saṃskāranirodho na tatra vijñānaṃ na vijñānanirodho na tatra nāmarūpaṃ na nāmarūpanirodho na tatra ṣaḍāyatanaṃ na ṣaḍāyatananirodho na tatra sparśo na sparśanirodho na tatra vedanā na vedanānirodho na tatra tṛṣṇa na tṛṣṇānirodho na tatra upādānaṃ na upādānanirodho na tatra bhavo na bhavanirodho na tatra jātir na jātinirodho na tatra jarāmaraṇaṃ na jarāmaraṇanirodho na tatra duḥkhaṃ na duḥkhaparijñāṇāṃ, na tatra samudayo na samudayaprahāṇaṃ, na tatra nirodho nirodhasākṣāt

kriyā, na tatra mārgo na mārgabhāvanā na tatra prāptir nābhisamayaḥ, na tatra srotaāpannāḥ na srotaāpattiphalaṃ, na tatra sakṛdāgāmī na sakṛdāgāmiphalaṃ, na tatrānāgāmī nānāgāmiphalaṃ na tatrārhannārhatphalaṃ, na tatra pratyekabuddho na pratyekabodhiḥ, na tatra bodhisattvo na mārgākārajñatā na tatra buddho na tatra bodhiḥ, evaṃ khalu śāradvatīputra bodhisattva mahāsattvaḥ prajñāpāramitāyāṃ caran yuktad iti vaktavyaḥ.（p.141, *l*.15）

２．チベット語訳『十万頌般若』：*Shes rab kyi pha rol tu phyin pa stong phrag brgya pa*, Lhasa Kanjur no.9, e-texts from ACIP.

②shā radwa ti'i bu/ gzugs kyi stong pa nyid gang yin pa de ni/ gzugs ma yin te/ 'di ltar/ gzugs kyi stong pa nyid gang【Ka117B】yin pa de thogs par byed pa med do/ /tshor ba'i stong pa nyid gang yin pa de ni/ tshor ba ma yin te/ 'di ltar/ tshor ba'i stong pa nyid gang yin ba de/ tshor bar mi byed do/ /'du shes kyi stong pa nyid gang yin pa de ni/ 'du shes ma yin te/ 'di ltar/ 'du shes kyi stong pa nyid gang yin pa de/ 'du shes su mi byed do/ /'du byed kyi stong pa nyid gang yin pa de ni/ 'du byed rnams ma yin te/ 'di ltar/ 'du byed kyi stong pa nyid gang yin pa de/ mngon par 'du mi byed do/ /rnam par shes pa'i stong pa nyid gang yin pa de ni/ rnam par shes pa ma yin te/ 'di ltar/ rnam par shes pa'i stong pa nyid gang yin pa de/ rnam par shes par mi byed do/ /de ci'i phyir zhe na/

③shā radwa ti'i bu/ gzugs kyang gzhan ma yin la/ stong pa nyid kyang gzhan ma yin/ stong pa nyid kyang gzhan ma yin la/ gzugs kyang gzhan ma yin te/

④（１）gzugs nyid kyang stong pa nyid la/ stong pa nyid kyang gzugs so/ /tshor ba'ang gzhan ma yin la/ stong pa nyid kyang gzhan ma yin/ stong pa nyid kyang gzhan ma yin la/ tshor ba'ang gzhan ma yin te/ tshor ba nyid kyang stong pa nyid la/ stong pa nyid kyang tshor ba'o/ /'du shes kyang gzhan ma yin la/ stong pa nyid kyang gzhan ma yin/ stong pa nyid kyang gzhan ma yin la/ 'du shes kyang

gzhan ma yin te/ 'du shes nyid kyang stong pa nyid la/ stong pa nyid kyang 'du shes so/ /'du byed rnams kyang gzhan ma yin la/ stong pa nyid【Ka118A】/ /kyang gzhan ma yin/ stong pa nyid kyang gzhan ma yin la/ 'du byed rnams kyang gzhan ma yin te/ 'du byed rnams kyang stong pa nyid la/ stong pa nyid kyang 'du byed rnams so/ /rnam par shes pa'ang gzhan ma yin la/ stong pa nyid kyang gzhan ma yin/ stong pa nyid kyang gzhan ma yin la/ rnam par shes pa'ang gzhan ma yin te/ rnam par shes pa nyid kyang stong pa nyid la/ stong pa nyid kyang rnam par shes pa'o/ /④（3）shā radwa ti'i bu/ stong pa nyid gang yin pa de ni mi skye mi 'gag cing / kun nas nyon mongs par 'gyur ba med/ rnam par byang ba med la/ 'grib pa med cing 'phel ba med pa ste/

⑤de ni 'das pa'ang ma yin/ ma 'ongs pa'ang ma yin/ da ltar byung ba'ang ma yin no/ /gang mi skye mi 'gag cing / kun nas nyon mongs par 'gyur ba med/ rnam par byang ba med la/ mi 'grib mi 'phel te/ 'das pa'ang ma yin/ ma 'ongs pa'ang ma yin/

⑥da ltar byung ba'ang ma yin pa de la ni gzugs med do/ tshor ba med do/ 'du shes med do/ /'du byed med do/ /rnam par shes pa med do/ /de la ni mig med do/ /rna ba med do/ /sna med do/ /lce med do/ /lus med do/ /yid med do/ /de la ni gzugs med do/ /sgra med do/ /dri med do/ /ro med do/ /reg bya med do/ /chos med do/ /de la ni mig gi khams med do/ /gzugs kyi【Ka118B】khams med do/ /mig gi rnam par shes pa'i khams med do/ /de la ni rna ba'i khams med do/ /sgra'i khams med do/ /rna ba'i rnam par shes pa'i khams med do/ /de la ni sna'i khams med do| |dri'i khams med do/ /sna'i rnam par shes pa'i khams med do/ /de la ni lce'i khams med do/ /ro'i khams med do/ /lce'i rnam par shes pa'i khams med do/ /de la ni lus kyi khams med do/ /reg bya'i khams med do/ /lus kyi rnam par shes pa'i khams med do/ /de la ni yid kyi khams med do/ /chos kyi khams med do/ /yid kyi rnam par shes pa'i khams med do/ /de la ni sa'i khams med do/ /chu'i khams med do/ /me'i khams med do/ /rlung gi khams med do/ /nam mkha'i khams med do/ /rnam par shes pa'i

khams med do// // shes rab kyi pha rol tu phyin pa stong phrag brgya pa/ bam po drug pa/ de la ni ma rig pa med do/ /ma rig pa 'gag pa med do/ /de la ni 'du byed med do/ /'du byed 'gag pa med do/ /de la ni rnam par shes pa med do/ /rnam par shes pa 'gag pa med do/ /de la ni ming dang gzugs med do/ /ming dang gzugs 'gag pa med do/ / de la ni skye mched drug med do/ /skye mched drug 'gag pa med do/ /de la ni reg pa med do/ /reg pa 'gag pa med do/ / de la ni tshor ba med do/ /tshor ba 'gag pa med do/ /de la ni sred 【Ka119A】/ /pa med do/ /sred pa 'gag pa med do/ /de la ni/ len pa med do/ /len pa 'gag pa med do/ /de la ni/ srid pa med do/ /srid pa 'gag pa med do/ /de la ni/ skye ba med do/ / skye ba 'gag pa med do/ /de la ni/ rga shi med do/ /rga shi 'gag pa med do/ /de la ni/ sdug bsngal med do/ /sdug bsngal yongs su shes pa med do/ /de la ni/ kun 'byung ba med do/ /kun 'byung ba spang ba med do/ /de la ni/ 'gog pa med do/ /'gog pa mngon du bya ba med do/ /de la ni/ lam med do/ /lam bsgoms pa med do/ /de la ni/ thob par bya ba med do/ /mngon du shes par bya ba med do/ /

３．『二万五千頌般若』*Pañcaviṃśatisāhasrikā Prajñāpāramitā* 系

［１］Larger Prajñāpāramitā, in Facsimiles of the MS in GBM 175-675, fols. 1-27v1 = LPG[18]（ed. by Stefano Zaccheti）

yā śāradvatīputra rūpaśunyatā[19] na sā rūpaṃ yā vedanāśunyatā na sā vedanā | yā saṃjñāśunyatā na sā saṃjñā | yā saṃskāraśunyatā na te saṃskārā | yā vijñānaśunyatā na sā vijñānaṃ |

②tathā hi śāradvatīputra yā rūpaśunyatā na sā rūpayati | yā vedanāśunyatā na sā（LPG 21v）vedayati | yā saṃjñāśunyatā na sā saṃjānāti | yā saṃskāraśunyatā na sābhisaṃskaroti | yā vijñānaśunyatā na sā vijānāti | tat kasya hetoḥ

③na hi śāradvatīputrānyad rūpam anyā śunyatā nānyā śunyatānyad rūpam*

④(１) rūpam eva śunyatā śunyataiva rūpam* evaṃ nānyā vedanānyā śunyatā | nānyā saṃjñā nānyā śunyatā | nānye saṃskārā

anyā śunyatā | nānya*d* vijñānam anyā śunyatā | nānyā śunyatānyad vijñānaṃ | vijñānam eva śunyatā śunyataiva vijñānaṃ | (3) yā śāradvatīputra śunyatā na sā utpadyate na nirudhyate | na saṃkliśyate na vyavadāyate | na hīyate na vardhate |
⑤nātītā nānāgatā na pratyutpannā yā notpadyate na nirudhyate | na saṃkliśyate na vyavadāyate | na hīyate na vardhate | nātītā nānāgatā na pratyutpannā :
⑥na tatra rūpaṃ na vedanā na saṃjñā na saṃskārā na vijñānaṃ na cakṣur na śrotraṃ na ghrāṇaṃ na jihvā kāyo na manaḥ na rūpaṃ na śabdo na gandho na raso na sparśo na dharmāḥ na tatra skandhā na dhātavo nāyatanāni na tatra cakṣurdhātur na rūpadhātur na cakṣurvijñānadhātur na śrotradhātur na śabdadhātur na śrotravijñānadhātuḥ na ghrāṇadhātur na gandhadhātur na ghrāṇavijñānadhātur na jihvādhātur na rasadhātur na jihvāvijñānadhātuḥ na kāyadhātur na spraṣṭavyadhātur na kāyavijñānadhātur na manodhātur na dharmadhātur na manovijñānadhātur na tatrāvidyā nāvidyānirodhaḥ na saṃskārā nna saṃskāranirodhaḥ na vijñānaṃ na vijñānanirodhaḥ na nāmarūpaṃ na nāmarūpanirodhaḥ na ṣaḍāyatanaṃ na ṣaḍāyatananirodhaḥ na sparśo na sparśanirodhaḥ na vedanā na vedanānirodhaḥ na tṛṣṇā na tṛṣṇānirodhaḥ nopādānaṃ nopādānanirodhaḥ na bhavo na bhavanirodhaḥ na jātir na jātinirodhaḥ na jarāmaraṇaṃ na jarāmaraṇanirodhaḥ na duḥkhaṃ na samudayo na nirodho na mārgaḥ na prāptir nābhisamayaḥ na srotaāpanno na srotaāpattiphalaṃ na sakṛdāgāmī (LPG 22r)

[2] *Pañcaviṃśatisāhasrikā Prajñāpāramitā* I-1, ed. Takayasu KIMURA (Tokyo : Sankibo Busshorin, 2007) = PvsP I -1
tathā hi śāriputra yā rūpasya śūnyatā na tad rūpam, yā vedanāyāḥ śūnyatā na sā vedanā, yā (PvsP I -1 : 64) saṃjñāyāḥ śūnyatā na sā saṃjñā, yā saṃskārāṇāṃ śūnyatā na te saṃskārāḥ, yā vijñānasya śūnyatā na tad vijñānam. tat kasya hetoḥ?

② (PvsP I -1:64, *l*.2) tathā hi yā rūpaśūnyatā na sā rūpayati, yā vedanāśūnyatā na sā vedayati, yā saṃjñāśūnyatā na sā saṃjānīte, yā saṃskāraśūnyatā na sābhisaṃskāroti, yā vijñānaśūnyatā na sā vijānāti, tat kasya hetoḥ?
③tathā hi śāriputra nānyad rūpam anyā śūnyatā, nānyā śūnyatā anyad rūpaṃ,
④ (1) rūpam eva śūnyatā śūnyataiva rūpam, nānyā vedanā anyā śūnyatā, nānyā śūnyatā anyā vedanā, vedanaiva śūnyatā śūnyataiva vedanā, nānyā saṃjñā anyāśūnyatā, nānyā śūnyatā anyā saṃjñā, saṃjñaiva śūnyatā śūnyataivasaṃjñā, nānye saṃskārā anyā śūnyatā, nānyā śūnyatā anye saṃskārāḥ, saṃskārā eva śūnyatā śūnyataiva saṃskārāḥ, nānyad vijñānam anyā śūyatā, nānyā śūnyatā anyad vijñānaṃ, vijñānam eva śūnyatā śūnyataiva vijñānam.
iti samudayasatyāvavādaḥ
(3) śūnyatā śāriputra notpadyate na nirudhyate, na saṃkliśyate na vyavadāyate, na hīyate na vardhate,
⑤nātītā nānāgatā na pratyutpannā,
⑥yā ca īdṛśī na tatra rūpaṃ na vedanā na saṃjñā na saṃskārā na vijñānaṃ na pṛthivīdhātur nābdhātur na tejodhātur na vāyudhātur nākāśadhātur na vijñānadhātur na cakṣurāyatanaṃ na rūpāyatanaṃ na śrotrāyatanaṃ na śabdāyatanaṃ na ghrāṇāyatanaṃ na gandhāyatanaṃ na jihvāyatanaṃ rasāyatanaṃ na kāyāyatanaṃ spraṣṭavyāyatanaṃ na manaāyatanaṃ dharmāyatanam, na cakṣurdhātur na rūpadhātur na cakṣurvijñānadhātuḥ, na śrotradhātur na śabdadhātur na śrotravijñānadhātuḥ, na ghrāṇadhātur na gandhadhātur na ghrāṇavijñānadhātuḥ, na jihvādhātur na rasadhātur na jihvāvijñānadhātuḥ, na kāyadhātur na spraṣṭavyadhātur na kāyavijñānadhātuḥ na manodhātur na dharmadhātur na manovijñānadhātuḥ, nāvidyotpādo nāvidyānirodhaḥ, na saṃskārotpādo na saṃskāranirodhaḥ, na vijñānotpādo na vijñānanirodhaḥ, na nāmarūpotpādo na nāmarūpanirodhaḥ, na ṣaḍāyatanotpādo na ṣaḍāyatananirodhaḥ, na sparśotpādo na sparśanirodhaḥ, na

vedanotpādo na vedanānirodhaḥ, na tṛṣṇotpādo na tṛṣṇānirodhaḥ, na upādānotpādo nopādānanirodhaḥ, na bhavotpādo na (PvsP1-1 : 65) bhavanirodhaḥ, na jātyutpādo na jātinirodhaḥ na jarāmaraṇaśokaparid evaduḥkhadaurmanasyopāyāsotpādo na jarāmaraṇaśokaparidevaduḥk hadaurmanasyopāyāsanirodhaḥ, na duḥkhaṃ na samudayo na nirodho na mārgo na prāptir nābhisamayo ….. iti nirodhasatyāvavādaḥ.

4. チベット語訳『二万五千頌般若』経部, Lhasa ed., no.10, rKTs-K9.

② 'di ltar gzugs kyi stong pa nyid gang yin pa de thogs par byed pa med do/ /tshor ba'i stong pa nyid gang yin pa de tshor par mi byed do/ /'du shes kyi stong pa nyid gang yin pa de 'du shes su mi byed do/ /

【Ka69A】/ /'du byed kyi stong pa nyid gang yin pa de mngon par 'du mi byed do/ /rnam par shes pa'i stong pa nyid gang yin pa de rnam par shes par mi byed do/ /de ci'i phyir zhe na/

③shā radwa ti'i bu/ gzugs kyang gzhan ma yin la/ stong pa nyid kyang gzhan ma yin/ stong pa nyid kyang gzhan ma yin la/ gzugs kyang gzhan ma yin te/

④ (1) gzugs nyid kyang stong pa nyid la/ stong pa nyid kyang gzugs so/ /tshor ba yang gzhan ma yin la/ stong pa nyid kyang gzhan ma yin/ stong pa nyid kyang gzhan ma yin la/ tshor ba'ang gzhan ma yin te/ tshor ba nyid kyang stong pa nyid la/ stong pa nyid kyang tshor ba'o/ /'du shes kyang gzhan ma yin la/ stong pa nyid kyang gzhan ma yin/ stong pa nyid kyang gzhan ma yin la/ 'du shes kyang gzhan ma yin te/ 'du shes nyid kyang stong pa nyid la/ stong pa nyid kyang 'du shes so/ /'du byed rnams kyang gzhan ma yin la/ stong pa nyid kyang gzhan ma yin/ stong pa nyid kyang gzhan ma yin la/ 'du byed rnams kyang gzhan ma yin te/ 'du byed rnams kyang stong pa nyid la/ stong pa nyid kyang 'du byed rnams so/ / rnam par shes pa'ang gzhan ma yin la/ stong pa nyid kyang gzhan ma yin/ stong pa nyid kyang gzhan ma yin la/ rnam par shes pa'ang gzhan ma yin te/ rnam par shes pa nyid kyang stong pa nyid la/

stong pa nyid kyang rnam par shes【Ka69B】pa'o/ /shā radwa ti'i bu/ stong pa nyid gang yin pa de ni

④（3）mi skye mi 'gag cing / kun nas nyon mongs bar 'gyur ba med/ rnam par byang ba med la/ 'grib pa med cing 'phel ba med pa ste/ de ni 'das pa'ang ma yin/ ma 'ongs pa'ang ma yin/ da ltar byung ba'ang ma yin no/ /gang mi skye mi 'gag cing / kun nas nyon mongs par 'gyur ba med/ rnam par byang ba med pa la/ mi 'grib mi 'phel te/ 'das pa'ang ma yin/ ma 'ongs pa'ang ma yin/ da ltar byung ba'ang ma yin pa ⑥de la ni gzugs med do/ /tshor ba med do/ /'du shes med do/ /'du byed med do/ /rnam par shes pa med do| |de la ni mig med do/ /rna ba med do/ /sna med do/ /lce med do/ /lus med do/ /yid med do/ /de la ni gzugs med do/ /sgra med do/ /dri med do/ /ro med do/ /reg bya med do/ /chos med do| |de la ni sa'i khams med do/ /chu'i khams med do/ /me'i khams med do/ /rlung gi khams med do/ /nam mkha'i khams med do/ /rnam par shes pa'i khams med do/ /de la ni mig gi khams med do/ /gzugs kyi khams med do/ /mig gi rnam par shes pa'i khams med do/ /rna ba'i khams med do/ /sgra'i khams med do/ /rna ba'i rnam par shes pa'i khams med do/ / sna'i khams med do/ /dri'i khams med do/ /sna'i rnam par shes pa'i khams med do/ /lce'i khams med do/ /ro'i khams med do/ /lce'i rnam par shes pa'i khams med do/ /lus kyi【Ka70A】/ /khams med do/ /reg bya'i khams med do/ /lus kyi rnam par shes pa'i khams med do/ /yid kyi khams med do/ /chos kyi khams med do/ /yid kyi rnam par shes pa'i khams med do/ /de la ni ma rig pa med do/ /ma rig pa 'gag pa med do/ /'du byed med do/ /'du byed 'gag pa med do/ /rnam par shes pa med do/ /rnam par shes pa 'gag pa med do/ /ming dang gzugs med do/ /ming dang gzugs 'gag pa med do/ /skye mched drug med do/ / skye mched drug 'gag pa med do/ /reg pa med do/ /reg pa 'gag pa med do/ /tshor ba med do/ /tshor ba 'gag pa med do/ /sred pa med do/ /sred pa 'gag pa med do/ /len pa med do/ /len pa 'gag pa med do/ /srid pa med do/ /srid pa 'gag pa med do/ /skye ba med do/ / skye ba 'gag pa med do/ / rga shi med do/ /rga shi 'gag pa med do/

/de la ni sdug bsngal med do/ /sdug bsngal yongs su shes pa med do/ /kun 'byung ba med do/ /kun 'byung ba spang ba med do/ /'gog pa med do/ / 'gog pa mngon du bya ba med do/ /lam med do/ /lam bsgom pa med do/ /de la ni thob par bya ba med do/ /mngon du shes par bya ba med do/ /

５．チベット語訳『二万五千頌般若』論部, Peking ed., vol.88, Ga 62a3-63b4.

④（３）de ci'i phyir zhe na/ sā ri'i bu stong pa nyid ni mi skye mi 'gag cing kun nas nyon mongs pa ma yin/ rnam par byang ba ma yin/ 'grib pa ma yin/ 'phel ba ma yin/

⑤'das pa ma yin/ ma 'ongs pa ma yin/ da ltar byung ba ma yin no/

⑥gang yang 'dri 'dra ba de la ni gzugs med/ tshor ba med/ 'du shes med dang/ 'du byed rnams med/ rnam par shes pa med do/

６．漢訳拡大般若

［１］『初会』（T220.05. 22a29～22b17）

何以故。②舍利子。諸色空彼非變礙相。諸受空彼非領納相。諸想空彼非取像相。諸行空彼非造作相。諸識空彼非了別相。何以故。③舍利子。色不異空。空不異色。④（１）色即是空。空即是色。受想行識不異空。空不異受想行識。受想行識即是空。空即是受想行識。何以故。④（３）舍利子。是諸法空相不生不滅。不染不淨。不增不減。⑤非過去。非未來。非現在。⑥舍利子。如是空中。無色。無受想行識。無地界。無水火風空識界。無眼處。無耳鼻舌身意處。無色處。無聲香味觸法處。無眼界。無耳鼻舌身意界。無色界。無聲香味觸法界。無眼識界。無耳鼻舌身意識界。無眼觸。無耳鼻舌身意觸。無眼觸爲縁所生諸受。無耳鼻舌身意觸爲縁所生諸受。無無明生。無無明滅。無行識名色六處觸受愛取有生老死愁歎苦憂惱生。無行乃至老死愁歎苦憂惱滅。無苦聖諦。無集滅道聖諦。無得。無現觀。

［２］『二会』（T220.07.14a08～14a23）

何以故。②舍利子。諸色空彼非變礙相。諸受空彼非領納相。諸想空彼非

取像相。諸行空彼非造作相。諸識空彼非了別相。何以故。③舍利子。色不異空。空不異色。④（1）色即是空。空即是色。受想行識不異空。空不異受想行識。受想行識即是空。空即是受想行識。④（2）舍利子。是諸法空相。④（3）不生不滅。不染不淨。不增不減。⑤非過去非未來非現在。⑥如是空中無色無受想行識。無眼處無耳鼻舌身意處。無色處無聲香味觸法處。無眼界色界眼識界。無耳界聲界耳識界。無鼻界香界鼻識界。無舌界味界舌識界。無身界觸界身識界。無意界法界意識界。無無明亦無無明滅。乃至無老死愁歎苦憂惱。亦無老死愁歎苦憂惱滅。無苦聖諦無集滅道聖諦。無得無現觀。

［3］『三会』（T220.07.435b25～435c09）
②舍利子。諸色空彼非變礙相。諸受空彼非領納相。諸想空彼非取像相。諸行空彼非造作相。諸識空彼非了別相。何以故。③舍利子。色不異空。空不異色。④（1）色即是空。空即是色。受想行識亦復如是。④（2）舍利子。是諸法空相。④（3）不生不滅不染不淨不增不減。⑤非過去非未來非現在。⑥如是空中。無色無受想行識。無眼處無耳鼻舌身意處。無色處無聲香味觸法處。無地界無水火風空識界。無眼界無耳鼻舌身意界。無色界無聲香味觸法界。無眼識界無耳鼻舌身意識界。無無明亦無無明滅。無行識名色六處觸受愛取有生老死。無行乃至老死滅。無苦聖諦無集滅道聖諦。無得無現觀。

［4］『放光』（T221.08.0006a03～6a12）
②舍利弗。用色空故爲非色。用痛想行識空故爲非識。色空故無所見。痛空故無所覺。想空故無所念。行空故無所行。識空故不見識。何以故。③色與空等無異。所以者何。④（1）色則是空空則是色。痛想行識則亦是空。空則是識。④（3）亦不見生亦不見滅。亦不見著亦不見斷。亦不見增亦不＊見減。⑤亦不過去當來今現在。⑥亦無五陰亦無色聲香味細滑法。亦無眼耳鼻舌身意。亦無十二因緣亦無四諦。亦無所逮得。

［5］『光讚』（T222.08.0153c04～153c20）
舍利弗。其爲空者。無有起者無有滅者。②假使色空則無有色。假使痛痒思想生死識空則無有識。設使色空則不有見。設痛痒空則無所患。設思想

空則無所念。設使行空則無所造。設識空者無所分別。所以者何。③舍利弗。色者則異不與空同。空不爲異色不爲分別。④（１）色自然空色則爲空。痛痒思想生死識。不爲別異空亦不異。設空不異識亦不異。識自然空識則爲空。佛語舍利弗。其爲空者。④（３）不起不滅無所依著無所諍訟。無所增無所損。⑤無過去無當來無現在。⑥彼亦無色痛痒思想生死識。亦無眼耳鼻＊舌身心。亦無色聲香味細滑。所欲法彼則無。無黠不滅無黠不行。不識不名色不六入不細滑不痛不愛不受不有不生不老不病不死亦不滅。除生老病死。彼亦不苦亦無＊習亦無所盡亦無所由。彼亦無得亦無有時。

［６］『大品』（T223.08.0223a10～223a20）
②舍利弗。色空故無惱壞相。受空故無受相。想空故無知相。行空故無作相。識空故無覺相。何以故。③舍利弗。色不異空（空不＝非空）空不（色不＝非色）異色。④（１）色即是空空即是色。受想行識亦如是。④（２）舍利弗。是諸法空相（空相＝相空）。④（３）不生不滅。不垢不淨不不滅。⑤是空法非過去非未來非現在。⑥是故空中無色無受想行識。無眼耳鼻舌身意。無色聲香味觸法。無眼界乃至無意識界。亦無無明亦無無明盡。乃至亦無老死亦無老死盡。無苦集滅道。亦無智亦無得。

７．拡大般若経の近似した空性表現

［１］Facsimiles of the MS in GBM= LPG（『二万五千頌般若』ギルギット写本）（ed. by Stefano Zaccheti）
（LPG 17v）evam ukte āyuṣmāṃc chāradvatiputro bhagavantam etad avocat* kathaṃ punar bhagavan bodhisatvena mahāsatvena prajñāpāramitāyāṃ caritavyam* bhagavān āha | iha śāradvatīputra bodhisatvo mahāsatvaḥ prajñāpāramitāyāṃ caran bodhisatva iti na samanupaśyati | bodhisatvanāmāpi na samanupaśyati | bodhisatvacaryām api na samanupaśyati | prajñāpāramiteti na samanupaśyati | prajñāpāramitānāmāpi na samanupaśyati | caratīti na samanupaśyati | na caratīti na samanupaśyati | rūpam api na samanupaśyati | vedanāṃ saṃjñāṃ saṃskārān vijñānam api na samanupaśyati | tat kasya hetoḥ tathā hi sa bodhisatvo nāmasvabhāvena śunyaḥ na śunyatayā rūpaṃ śunyaṃ na vedanā

saṃjñā saṃskārā na śunyatayā vijñānaṃ śunyam* ③nānyatra rūpāc chunyatā nānyatra vedanāyāḥ saṃjñāyāḥ saṃskārebhyo nānyatra vijñānāc chunyatā | ④(1) śunyataiva rūpaṃ śunyataiva vedanā saṃjñā saṃskārāḥ śunyataiva vijñānaṃ tat kasya hetoḥ tathā hi nāmamātram idaṃ yad uta bodhiḥ nāmamātram idaṃ yad uta bodhisatvaḥ nāmamātram idaṃ yad uta cchunyatā | nāmamātram idaṃ yad uta rūpaṃ vedanā saṃjñā saṃskārā vijñānaṃ | tathā hi māyopamaṃ rūpam vedanā saṃjñā saṃskārā māyopamaṃ vijñānaṃ māyā ca nāmamātraṃ na deśasthā na pradeśasthā : asad abhūtaṃ vitathasamaṃ māyādarśanaṃ svabhāvarahitaṃ asvabhāvaś ④(3) cānutpādaḥ anirodaḥ na hānir na vṛddhiḥ na saṃkleśo na vyavadānam evaṃ caran bodhisatvo mahāsatvaḥ utpādaṃ na samanupaśyati | nirodhaṃ na samanupaśyati | sthānaṃ na samanupaśyati | hāniṃ na samanupaśyati | (LPG 18r) vṛddhiṃ na samanupaśyati | saṃkleśan na samanupaśyati | vyavadānan na samanupaśyati | rūpan na samanupaśyati | vedanāṃ saṃjñāṃ saṃskārān vijñānaṃ na samanupaśyati | bodhir iti bodhisatva iti yad ucyate tad api na samanupaśyati | tat kasya hetoḥ kṛtriman nāma pratipratidharman te kalpitā āgantukena nāmadheyenābhūtaparikalpitena vyavahṛyante // vyavahārāc cābhiniviśyante | tad bodhisatvo mahāsatvaḥ prajñāpāramitāyāṃ caran sarvadharmān na samanupaśyaty asamanupaśyan na manyate | nābhiniviśate | // (ed. by Stefano Zacchetti, p.388)

［2］『二万五千頌般若』PV Ⅰ-1, ed. Takayasu Kimura, Tokyo, 2007.
evam ukte āyuṣmān śāriputro bhagavantam etad avocat : kathaṃ bhagavan bodhisattvena mahāsattvena prajñāpāramitāyāṃ caritavyam?
evam ukte bhagavān āyuṣmantaṃ śāriputram etad avocat : iha śāriputra bodhisattvo mahāsattvaḥ prajñāpāramitāyāṃ caran bodhisattva eva samāno bodhisattvaṃ na samanupaśyati, bodhisattvanāmāpi na samanupaśyati, bodhisattvacaryām api na

samanupaśyati, prajñāpāramitām api na samanupaśyati, rūpam api na samanupaśyati, evaṃ vedanāṃ saṃjñāṃ saṃskārān vijñānam api na samanupaśyati, tat kasya hetoḥ? tathā hi bodhisattvo mahāsattvo bodhisattvasvabhāvena śūnyaḥ prajñāpāramitā prajñāpāramitāsvabhāvena śūnyaḥ. tat kasya hetoḥ? prakṛtir asyaiṣā, tathā hi śūnyatayā na rūpaṃ śūnyaṃ, na vedanā na saṃjñā na saṃskārā na vijñānaṃ śūnyatayā śūnyaṃ, ③nānyatra rūpāc chūnyatā, nānyatra vedanāyāḥ śūnyatā, nānyatra saṃjñāyāḥ śūnyatā, nānyatra saṃskārebhyaḥ śūnyatā, nānyatra vijñānāc chūnyatā. tat kasya hetoḥ? ④（1）rūpam eva śūnyatā, vedanaiva śūnyatā, saṃjñaiva śūnyatā, saṃskārā eva śūnyatā, vijñānam eva śūnyatā, śūnyataiva rūpaṃ, śūnyataiva vedanā, śūnyataiva saṃjñā, śūnyataiva saṃskārāḥ, śūnyataiva vijñānam. tat kasya hetoḥ? tathā hi nāmamātram idaṃ yad idaṃ bodhisattva iti, nāmamātram idaṃ yad idaṃ prajñāpāramiteti, nāmamātram idaṃ yad idaṃ rūpaṃ vedanā saṃjñā saṃskārā vijñānaṃ, tathā hi māyopamaṃ rūpaṃ vedanā saṃjñā saṃskārā vijñānaṃ, māyā ca nāmamātraṃ na deśasthā na pradeśasthā asadasaṃbhūtaṃ vitathadarśanasamaṃ, māyādarśanasvabhāvasya hi ④（3）notpādo na nirodho na saṃkleśo na vyavadānam, evaṃ prajñāpāramitāyāṃ caran bodhisattvo mahāsattva utpādam api na samanupaśyati, nirodham api na samanupaśyati, saṃkleśam api na samanupaśyati, vyavadānam api na samanupaśyati. tat kasya hetoḥ? tathā hi kṛtrimaṃ nāma pratidharmaṃ, te ca kalpitāḥ, āgantukena nāmadheyena vyavahriyante, tāni bodhisattvaḥ prajñāpāramitāyāṃ caran sarvanāmāni na samanupaśyati asamanupaśyan nābhiniviśate. (PV Ⅰ-1：53-54)

［3］『放光』

舍利弗白佛言。菩薩當云何行般若波羅蜜。佛告舍利弗。菩薩行般若波羅蜜者。不見有菩薩亦不見字。亦不見般若波羅蜜。悉無所見亦不見不行者。何以故。菩薩空字亦空 空無有五陰。何謂五陰。色陰痛陰想陰行陰識陰。④（1）五陰則是空 空則是五陰。何以故。但字耳。以字故名爲道。以

字故名爲菩薩。以字故名爲空。以字故名爲五陰。其實亦④(3) 不生亦不滅。亦無著亦無斷。菩薩作如是行者。亦不見生亦不見滅。亦不見著亦不見斷。何以故。但以空爲法立名假號爲字耳。菩薩行般若波羅蜜。不見諸法之字。以無所見故無所入（大正8, 221, 4c17ff)

[4]『光讃』

舍利弗白佛。唯天中天。云何菩薩摩訶薩行般若波羅蜜。佛告舍利弗。菩薩摩訶薩行般若波羅蜜。不見菩薩。亦不見菩薩字。亦不見般若波羅蜜。亦不見行般若波羅蜜字。亦不見非行。所以者何。菩薩之字自然空。其爲空者無色。無痛痒思想生死識。③不復異色空。不復異痛痒思想生死識空。如色空痛痒思想生死識亦空。④(1)所謂空者色則爲空。痛痒思想生死識亦自然。所以者何。所謂菩薩但假號耳。所謂道者則亦假號。所謂空者則亦假號。④(2)其法自然　④(3)不起不滅。亦無塵勞無所依倚無所諍訟。若有菩薩所行如是。不見所起亦不見所滅。不見所猗不見所訟。所以者何。誑詐立字因遊客想。或想念故而致此法。從何立字但託虛言。曉了如是。菩薩摩訶薩則爲行般若波羅蜜一切不見有名號也已無所見 亦非不見。則無所猗。則爲行般若波羅蜜（大正8, 222, 162a15ff)

[5]『大品』

舍利弗白佛言。菩薩摩訶薩云何應行般若波羅蜜。佛告舍利弗。菩薩摩訶薩行般若波羅蜜時。不見菩薩不見菩薩字。不見般若波羅蜜亦不見我行般若波羅蜜。亦不見我不行般若波羅蜜。何以故。菩薩菩薩字性空。⑥空中無色無受想行識。③離色亦無空。離受想行識亦無空。④(1)色即是空。空即是色。受想行識即是空。空即是識。何以故。舍利弗。但有名字故謂爲菩提。但有名字故謂爲菩薩。但有名字故謂爲空。所以者何。④(2)諸法實性。④(3)無生無滅無垢無淨故。菩薩摩訶薩如是行。亦不見生亦不見滅。亦不見垢亦不見淨。何以故。名字是因緣和合作法。但分別憶想假名説。是故菩薩摩訶薩行般若波羅蜜時。不見一切名字。不見故不著(大正8, 223, 221b24ff)

[6]『第二会』(大正7, 220, 11b25ff)

爾時舍利子白佛言。世尊。諸菩薩摩訶薩應云何修行般若波羅蜜多。佛言。

舍利子。菩薩摩訶薩修行般若波羅蜜多時。應如是觀。實有菩薩。不見有菩薩。不見菩薩名。不見般若波羅蜜多。不見般若波羅蜜多名。不見行。不見不行。何以故。舍利子。菩薩自性空。菩薩名空。所以者何。色自性空。不由空故。色空非色。③色不離空。空不離色。④(1)色即是空。空即是色。受想行識自性空。不由空故。受想行識空非受想行識。受想行識不離空。空不離受想行識。受想行識即是空。空即是受想行識。何以故。舍利子。此但有名謂爲菩提。此但有名謂爲薩埵。此但有名謂爲菩薩。此但有名謂之爲空。此但有名謂之爲色受想行識。④(3)如是自性無生無滅無染無淨。菩薩摩訶薩 如是修行般若波羅蜜多。不見生。不見滅。不見染。不見淨。何以故。但假立客名。分別於法。而起分別。假立客名。隨起言説。如如言説。如是如是。生起執著。菩薩摩訶薩修行般若波羅蜜多時。於如是等一切不見。由不見故不生執著

Ⅱ．般若心経の諸資料

1．梵本心経　*Prajñāpāramitāhṛdayasūtra*

［1］大本*Prajñāpāramitāhṛdayasūtram*, ed. by P. L. Vaidya in：*Mahayana-sutra-samgrahah*, Part 1. Darbhanga：The Mithila Institute 1961（Buddhist Sanskrit Texts, 17）

| namaḥ sarvajñāya ‖

①evaṃ mayā śrutam | ekasmin samaye bhagavān rājagṛhe viharati sma gṛdhrakūṭe parvate mahatā bhikṣusaṃghena sārdhaṃ mahatā ca bodhisattvasaṃghena | tena khalu samayena bhagavān gambhīrāvasaṃbodhaṃ nāma samādhiṃ samāpannaḥ | tena ca samayena āryāvalokiteśvaro bodhisattvo mahāsattvo gambhīrāyāṃ prajñāpāramitāyāṃ caryāṃ caramāṇaḥ evaṃ vyavalokayati sma | pañca skandhāṃstāṃśca svabhāvaśūnyaṃ vyavalokayati ‖

athāyuṣmān śāriputro buddhānubhāvena āryāvalokiteśvaraṃ bodhisattvametadavocat - yaḥ kaścit kulaputro [vā kuladuhitā vā asyāṃ] gambhīrāyāṃ prajñāpāramitāyāṃ caryāṃ cartukāmaḥ, kathaṃ śikṣitavyaḥ? evamukte āryāvalokiteśvaro bodhisattvo mahāsattvaḥ āyuṣmantaṃ śāriputrametadavocat - yaḥ

kaścicchāriputra kulaputro va kuladuhitā vā [asyāṃ] gambhīrāyāṃ prajñāpāramitāyāṃ caryāṃ cartukāmaḥ, tenaivaṃ vyavalokitavyam – pañca skandhāṃstāṃśca svabhāvaśūnyān samanupaśyati sma |
rūpaṃ śūnyatā, śūnyataiva rūpam/ ③rūpān na pṛhak śūnyatā, śūnyatāyā na pṛthag rūpam/ ④ (1) yad rūpaṃ sā śūnyatā, yā śūnyatā tad rūpam/ evaṃ vedanāsaṃjñāsaṃskāravijñānāni ca śūnyatā/ (2) evaṃ śāriputra sarvadharmāḥ śūnyatālakṣaṇā (3) anutpannā aniruddhā amalā vimalā anūnā asaṃpūrṃāḥ ⑥tasmāt tarhi śāriputra śūnyatāyāṃ na rūpam, na vedanā, sa saṃjñā, na saṃskārāḥ, na vijñānam, na cakṣur na śrotraṃ na ghrāṇaṃ na jihvā na kāyo na mano na rūpaṃ na śabdo na gandho na raso na spraṣṭavyaṃ na dharmaḥ/ na cakṣurdhātur yāvan na manodhātur na dharmadhātur na manovijñānadhātuḥ/ na vidyā nāvidyā na kṣayo yāvanna jarāmaraṇaṃ na jarāmaraṇakṣayaḥ, na duḥkhasamudayanirodhamārgā na jñānaṃ na prāptir nāprāptiḥ/

[2] 小本*Prajñāpāramitāhṛdayasūtram*, ed. by P. L. Vaidya in : *Mahāyāna-sutra-saṃgrahaḥ*, Part 1. Darbhanga : The Mithila Institute 1961 (Buddhist Sanskrit Texts, 17)
namaḥ sarvajñāya ||
āryāvalokiteśvarabodhisattvo gambhīrāyāṃ prajñāpāramitāyāṃ caryāṃ caramāṇo vyavalokayati sma | pañca skandhāḥ, tāṃśca svabhāvaśūnyān paśyati sma ||
iha śāriputra rūpaṃ śūnyatā, śūnyataiva rūpam| ③rūpān na pṛthak śūnyatā, śūnyatāyā na pṛthag rūpam| ④ (1) yadrūpaṃ sā śūnyatā, yā śūnyatā tadrūpam||
evameva vedanāsaṃjñāsaṃskāravijñānāni||
(2) evaṃ śāriputra sarvadharmāḥ śūnyatālakṣaṇā (3) anutpannā aniruddhā amalā na vimalā nonā na paripūrṇāḥ | ⑥tasmācchāriputra śūnyatāyāṃ na rūpam, na vedanā, na saṃjñā, na saṃskārāḥ, na vijñānāni | na cakṣuḥśrotraghrāṇajihvākāyamanāṃsi, na rūpaśabdaga ndharasaspraṣṭavyadharmāḥ| na cakṣurdhāturyāvanna manodhātuḥ ||

na vidyā nāvidyā na vidyākṣayo nāvidyākṣayo yāvanna jarāmaraṇaṃ na jarāmaraṇakṣayo na duḥkhasamudayanirodhamārgā na jñānaṃ na prāptitvam||

2．チベット語訳『般若心経』*Shes rab kyi pha rol tu phyin pa'i snying po*, rKTs-K529, H26（ラサ版）in *Sher phyin sna tshogs*, ka, 259.a.6-261.a.3＝Silk ed., Recension B

【259[a]】//rgya gar skad du/ ārya bha ga ba ti pra dznyā pa ra mi tā hri da ya/ bod skad du/ 'phags pa bcom ldan 'das ma shes rab kyi pha rol tu phyin pa'i snying po| bam po gcig go/ sangs rgyas dang / byang chub sems dpa' thams cad la phyag 'tshal lo/ /'di skad bdag gis thos pa'i dus gcig na/ bcom ldan 'das rgyal 【259[b]】 bo'i khab na bya rgod phung po'i ri la dge slong gi dge 'dun chen po dang / byang chub sems dpa'i dge 'dun chen po dang thabs cig tu bzhugs te/ de'i tshe bcom ldan 'das zab mo snang ba zhes bya ba'i chos kyi rnam grangs kyi ting nge 'dzin la snyoms par zhugs so/ /yang de'i tshe byang chub sems dpa' sems dpa' chen po 'phags pa spyan ras gzigs dbang phyug shes rab kyi pha rol tu phyin pa zab mo spyod par rnam par blta zhing / phung po lnga po de dag la yang ngo bo nyid kyis stong par rnam par blta'o/ /de nas sangs rgyas kyi mthus tshe dang ldan pa shā radwa ti'i bus byang chub sems dpa' sems dpa' chen po 'phags pa spyan ras gzigs dbang phyug la 'di skad ces smras so/ / rigs kyi bu'am/ rigs kyi bu mo gang la la shes rab kyi pha rol tu phyin pa zab mo'i spyod pa spyad par 'dod pa des ji ltar bslab par bya/ de skad ces smras pa dang / byang chub sems dpa' sems dpa' chen po 'phags pa spyan ras gzigs dbang phyug gis tshe dang ldan pa shā ri'i bu la 'di skad ces smras so/ /shā ri'i bu/ rigs kyi bu'am/ rigs kyi bu mo gang la la shes rab kyi pha rol tu phyin pa zab mo'i spyod pa spyad par 'dod pa des 'di ltar rnam par blta bar bya ste/ phung po lnga po de dag kyang ngo bo nyid kyis stong par rnam par rjes su blta'o/ /④（1）gzugs stong pa'o/ /stong pa nyid gzugs so/ /③gzugs las stong pa 【260[a]】 / /nyid gzhan ma yin/ stong pa nyid las gzugs

gzhan ma yin no/ /de bzhin du tshor ba dang / 'du shes dang / 'du byed rnams dang / rnam par shes pa rnams stong pa'o/ /④（2）shā ri'i bu/ de lta bas na/ chos thams cad stong pa nyid de/ mtshan nyid med pa/ ④（3）ma skyes pa/ ma 'gag pa/ dri ma med pa/ dri ma dang bral ba med pa/ bri ba med pa /gang ba med pa'o/ /⑥shā ri'i bu/ de lta bas na stong pa nyid la gzugs med/ tshor ba med/ 'du shes med/ 'du byed rnams med/ rnam par shes pa med/ mig med/ rna ba med/ sna med/ lce med| lus med/ yid med/ gzugs med/ sgra med/ dri med/ ro med/ reg bya med/ chos med do/ /mig gi khams med cing / mig gi rnam par shes pa'i khams med pa nas yid kyi khams med cing / yid kyi rnam par shes pa'i khams kyi bar du yang med do/ /ma rig pa med cing / ma rig pa zad pa med pa nas rga shi med cing / rga shi zad pa'i bar du yang med do| |sdug bsngal ba dang / kun 'byung ba dang / 'gog pa dang / lam med/ ye shes med/ thob pa med/ ma thob pa yang med do/ /

3．『般若心経』漢訳類本の対照

［1］羅什訳『大明呪経』（T250.08.0847c11～847c20）
觀世音菩薩。行深般若波羅蜜時。照見五陰空。度一切苦厄。②舍利弗色空故無惱壞相。受空故無受相。想空故無知相。行空故無作相。識空故無覺相。何以故。③舍利弗非色異空。非空異色。④（1）色即是空。空即是色。受想行識亦如是。④（2）舍利弗是諸法空相。④（3）不生不滅。不垢不淨。不增不減。⑤是空法。非過去非未來非現在。⑥是故空中。無色無受想行識。無眼耳鼻舌身意。無色聲香味觸法。無眼界乃至無意識界。無無明亦無無明盡。乃至無老死無老死盡。無苦集滅道。無智亦無得。

［2］玄奘訳『般若波羅蜜多心経』（T251.08.0848c07～848c13）
觀自在菩薩。行深般若波羅蜜多時。照見五蘊皆空。度一切苦厄。③舍利子。色不異空。空不異色。④（1）色即是空。空即是色。受想行識亦復如是。④（2）舍利子。是諸法空相。④（3）不生不滅。不垢不淨不增不減。⑥是故空中。無色。無受想行識。無眼耳鼻舌身意。無色聲香味觸法。無眼界。乃至無意識界。無無明。亦無無明盡。乃至無老死。亦無老死盡。

（64）

無苦集滅道。無智亦無得。

［3］法月重訳『普遍智蔵般若波羅蜜多心経』（T252.08.0849a27～849b07）

如是我聞。一時佛在王舍大城靈鷲山中。與大比丘衆滿百千人。菩薩摩訶薩七萬七千人倶。其名曰觀世音菩薩。文殊師利菩薩。彌勒菩薩等。以爲上首。皆得三昧總持。住不思議解脱。爾時觀自在菩薩摩訶薩在彼敷坐。於其衆中即從座起。詣世尊所。面向合掌曲躬恭敬。瞻仰尊顏而白佛言。世尊。我欲於此會中。説諸菩薩普遍智藏般若波羅蜜多心。唯願世尊聽我所説。爲諸菩薩宣祕法要。

爾時世尊以妙梵音。告觀自在菩薩摩訶薩言。善哉善哉具大悲者。聽汝所説。與諸衆生作大光明。於是觀自在菩薩摩訶薩蒙佛聽許。佛所護念。入於慧光三昧正受。入此定已。以三昧力行深般若波羅蜜多時。照見五蘊自性皆空。彼了知五蘊自性皆空。從彼三昧安詳而起。

即告慧命舍利弗言。善男子。菩薩有般若波羅蜜多心。名普遍智藏。汝今諦聽善思念之。吾當爲汝分別解説。作是語已。慧命舍利弗白觀自在菩薩摩訶薩言。唯大淨者。願爲説之。今正是時。於斯告舍利弗。諸菩薩摩訶薩應如是學。色性是空空性是色。③色不異空空不異色。④（1）色即是空空即是色。受想行識亦復如是。識性是空空性是識。識不異空空不異識。識即是空空即是識。④（2）舍利子。是諸法空相。④（3）不生不滅不垢不淨不增不減。⑥是故空中無色。無受想行識。無眼耳鼻舌身意。無色聲香味觸法。無眼界乃至無意識界。無無明亦無無明盡。乃至無老死亦無老死盡。無苦集滅道。無智亦無得。

［4］般若共利言等訳『般若波羅蜜多心経』（T253.08.0849c06～849c12）

如是我聞。一時佛在王舍城耆闍崛山中。與大比丘衆及菩薩衆倶。時佛世尊即入三昧。名廣大甚深。爾時衆中有菩薩摩訶薩。名觀自在。行深般若波羅蜜多時。照見五蘊皆空。離諸苦厄。即時舍利弗承佛威力。合掌恭敬白觀自在菩薩摩訶薩言。善男子。若有欲學甚深般若波羅蜜多行者。云何修行。如是問已」

爾時觀自在菩薩摩訶薩告具壽舍利弗言。舍利子。若善男子善女人行甚深般若波羅蜜多行時。應觀五蘊性空。

③舎利子。色不異空空不異色。④（1）色即是空空即是色。受想行識亦復如是。④（2）舎利子。是諸法空相。④（3）不生不滅不垢不淨不增不減。⑥是故空中無色。無受想行識。無眼耳鼻舌身意。無色聲香味觸法。無眼界乃至無意識界。無無明亦無無明盡。乃至無老死亦無老死盡。無苦集滅道。無智亦無得。

［5］智慧輪訳『般若波羅蜜多心経』（T254.08.0850a20～850a27）

如是我聞。一時薄誐梵。住王舎城鷲峯山中。與大苾芻衆。及大菩薩衆倶。爾時世尊。入三摩地。名廣大甚深照見。時衆中有一菩薩摩訶薩。名觀世音自在。行甚深般若波羅蜜多行時。照見五蘊自性皆空。即時具壽舎利子。承佛威神。合掌恭敬。白觀世音自在菩薩摩訶薩言。聖者。若有欲學甚深般若波羅蜜多行。云何修行。如是問已。爾時觀世音自在菩薩摩訶薩。告具壽舎利子言。舎利子。若有善男子。善女人。行甚深般若波羅蜜多行時。應照見五蘊自性皆空。離諸苦厄。

②舎利子。色空。空性見色。③色不異空。空不異色。④（1）是色即空。是空即色。受想行識。亦復如是。④（2）舎利子。是諸法性相空。④（3）不生不滅。不垢不淨。不減不增。⑥是故空中。無色。無受想行識。無眼耳鼻舌身意。無色聲香味觸法。無眼界。乃至無意識界。無無明。亦無無明盡。乃至無老死盡。無苦集滅道。無智證無得。

［6］法成訳『般若波羅蜜多心経』燉煌石室本（T255.08.0850c04～850c12）

如是我聞。一時薄伽梵住王舎城鷲峯山中。與大苾蒭衆。及諸菩薩摩訶薩倶。爾時世尊等入甚深明了三摩地法之異門。復於爾時。觀自在菩薩摩訶薩。行深般若波羅蜜多時。觀察照見五蘊體性。悉皆是空。時具壽舎利子。承佛威力。白聖者觀自在菩薩摩訶薩曰。若善男子。欲修行甚深般若波羅蜜多者。復當云何修學。作是語已。觀自在菩薩摩訶薩答具壽舎利子言。若善男子及善女人。欲修行甚深般若波羅蜜多者。彼應如是觀察。五蘊體性皆空。

④（1）色即是空。空即是色。③色不異空。空不異色。如是受想行識。亦復皆空。④（2）是故舎利子。一切法空性。無相④（3）無生無滅。無垢離垢。無減無増。⑥舎利子。是故爾時空性之中。無色。無受。無想。無行。

亦無有識。無眼。無耳。無鼻。無舌。無身。無意。無色。無聲。無香。無味。無觸。無法。無眼界。乃至無意識界。無無明。亦無無明盡。乃至無老死。亦無老死盡。無苦集滅道。無智無得。

［７］施護訳『聖仏母般若波羅蜜多経』（T257.08.0852b21～852b28）
如是我聞。一時世尊。在王舍城鷲峯山中。與大苾芻衆千二百五十人俱。并諸菩薩摩訶薩衆。而共圍繞。爾時世尊。即入甚深光明宣説正法三摩地。時觀自在菩薩摩訶薩。在佛會中。而此菩薩摩訶薩。已能修行甚深般若波羅蜜多。觀見五蘊自性皆空。爾時尊者舍利子。承佛威神。前白觀自在菩薩摩訶薩言。若善男子善女人。於此甚深般若波羅蜜多法門。樂欲修學者。當云何學時觀自在菩薩摩訶薩。告尊者舍利子言。汝今諦聽爲汝宣説。若善男子善女人。樂欲修學此甚深般若波羅蜜多法門者。當觀五蘊自性皆空。何名五蘊自性空耶。
④（１）所謂即色是空４即空是色。③色無異於空。空無異於色。受想行識亦復如是。④（２）舍利子。此一切法如是空５相。④（３）無所生。無所滅。無垢染。無清淨。無増長。無損減。⑥舍利子。是故空中無色。無受想行識。無眼耳鼻舌身意。無色聲香味觸法。無眼界。無眼識界。乃至無意界。無意識界。無無明。無無明盡。乃至無老死。亦無老死盡。無苦集滅道。無智。無所得。亦無無得。